韓國慶州に於ける新羅時代の遺蹟

關野貞

緒言
一 總說
二 慶州の地勢
三 月城の遺址
四 陵墓
五 寺院
六 自餘遺物
七 結論

緒言

余先年韓國に游ひしこき先京城及開城に抵り高麗朝鮮兩朝の遺蹟を探り更に轉して釜山より慶州に入り其附近を踏査することに僅かに三日半大邱を過き伽倻山に上りて歸朝したり當時調査せし所の者を纂輯し韓國建築調査報告こ名け帝國大學工科大學報告第六號に於て公にせり而も其慶州附近の遺蹟に關しては研究未た盡さゝる所あり誤謬亦少しこなさす今其誤れるを正し足らさるを補ひ以て識者の敎を乞はんこ欲す唯當時行李匆々充分廢墟遺跡の探撿を遂くることこ能はさりしを以て猶重要なる遺蹟の多くを漏し說く所亦杜撰粗漏を免れさるへきは頗遺憾こする所他日再遊の機を待ちて補正せんこ欲するのみ。

一　總說

新羅の始祖赫居世漢の宣帝の五鳳元年(西暦紀元前五十七年)始めて慶州の六部を糾合し國を建て其二十一年京城を築き號して金城こ曰ふ其后閼英こ共に二聖こ稱せられ國土大に治まれり婆娑王の二十一年金城の東南に城を築き月城こ稱す逸聖王の時政事堂を置

き隄防を修め田野を闢き炤智王の時郵傳を設け市肆を開けり智證王の三年始めて國號を定めて王と稱す是れ文物漸く開け國家の體裁正に具はりたるの致す所なり其子法興王に至り官制服色を定め年號を建て且佛敎を行ひたり眞興王之に次き大に佛法を興隆し新宮を捨てゝ皇龍寺と爲し丈六の佛像を鑄終に王妃と共に剃髮するに至れり當時伽倻國より樂を傳へて音樂も亦進歩せり其文士を集めて國史を修撰せしか如き漢文學の進歩以てトすへきなり眞平王の時始めて唐に通せしか太宗武烈王不世出の英資を以て位に即き唐と連合し百濟を滅し其子文武王に至り更に唐兵と共に高勾麗を滅し始めて半嶋統一の基を開けり。

新羅唐の力を藉りて半嶋を統一せし前後より大に唐の文化を輸入し制度典章總て彼に倣ひ文學宗敎技術の如き亦其感化の下に發展し一時其隆昌を極むるに至れり特に佛敎は益上下の尊信を得浮石寺（文武王十五年）海印寺（憲德王十年）梵魚寺（興德王九年）の如き大伽藍漸次建立せられたり而も二百年間國内無事にして外寇の事なかりしより紀綱漸く弛廢し弓裔甄萱の徒相次て反し敬順王の時終に國を擧けて高麗に降るに至れり。

蓋新羅の文明は之を左の三期に別つことを得へし。

初期　漢化時代　赫居世より智證王に至る

中期　南北朝化時代　法興王より眞智王に至る

後期　唐化時代　眞平王より滅亡に至る

即ち初期は僅かに族制政治より一轉して君主政治となりしのみにして國家の體裁猶充分に整はさりしも早くより漢土の文化を輸入し國運益隆興し文化益發展せり之を新羅文明の第一期となす。

法興王の時始めて佛教を行ひしより支那南北朝の文化は之と共に滔々として傳來し眞興王の時に至り一時隆昌の極に達せり之を新羅文明の第二期となす。

眞平王の時始めて唐に通せしより初唐の制度文物滔々として流注し來り三國統一の大業と共に異常の發展をなせり而も晩年に及ひては紀綱の廢弛に伴ひ萎靡漸く振はさりし者の如し之を新羅文明の第三期となす。

新羅時代の主なる遺蹟は特に當時の首都たりし慶州附近に最も多く存在せり而も吾人不幸にして初期中期の遺物に接することと極めて稀なりき而も後期即唐式を祖述する所の者に至りては其標本必しも少なからす以て當時文化の一斑を徴すへく又以て唐朝及我邦との關係の概要を窺ふに足るへし。

二　慶州の地勢

慶州は新羅の建國より滅亡に至るまで殆千年間都城を置きし所にして其平野は人をして殆我寧樂の地を想起せしむ明活山東に峙ちて小なる春日山の如く仙桃山（一名西岳）西にありて矢田山生駒山に當り鰲山（又金鰲山と稱す）南に聳へて近く我金剛山を仰くか如し金剛山北に盤りて奈保山奈良山に似て稍高峻なり四道の川流此等諸山の間にある稍廣き谷を灌流して慶州の平野に會し東北流して迎日灣に注く其慶州の西を南より東北に向て流るゝ者を西川と稱し南の方鰲山の麓を流るゝ者を蚊川（一名南川）と稱し北にあるを星川（一名北川）と稱す共に西流して慶州城を挾みて西川に注く別に仙桃山の南に牟梁川あり東流して又西川に入る慶州の平野は到底大和の平原の十一に及はされとも猶韓國にありては比較的廣き者にして此等の川流によりて灌漑せられ土壤甚た肥沃なり且頗る形勝の地を占めしを以て新羅朝千年間の都城として永く隆盛を極むることを得たり。

當時都城の繁盛は如何なりしか名君賢相輩出して國力益張り終に三國を統一して空前の大業を遂け典章文物燦然として具はりたれは永く政治文學宗教美術の中心たりし其都城の發達想察するに餘りあり其王宮たりし金城半月城幷ひに南山城明活城の如き如何に宏壯を究めたりしか皇龍寺奉德寺靈妙寺芬皇寺の如き如何に偉麗を恣にせしか三國遺事に「第四十九憲康大王代、城中無二一草屋一、接レ角連レ墻、歌吹滿レ路、晝夜不レ絶」と曰へるか如き多少の誇張はありとするも當時人民の殷富にして物質的文明の如何に進歩せしかを推

想するに足れり同書又曰く「新羅全盛之時、京中十七萬八千九百三十六戸、一千三百六十坊、五十五里、三十五金入宅、(言富潤大宅也)」と今假りに一戸を平均五人として算すれは京城は實に當時人口殆九十萬を有せる大都會たりしなり其富盛以て概見すへきなり而るに今や慶州は舊都の西方に偏在せる小都會に過きす昔時繁華の地纔に累々たる無數の陵墓を餘し古塔殘墟の往々其間に横はれるを見るのみなり。

余か慶州の調査に費やせしは僅かに三日半のみ探撿の範圍頗る狹く遺物の研究遺漏極めて多し今は唯此短時日に於て見聞せし遺蹟の一斑を紹介せんと欲するのみ文學士今西龍氏去三十九年特に精細に此附近を探究し極めて興味ある調査を遂けられしにより更に詳密なる事項は同氏の報告に待たんと欲するなり。

三　月城の遺址（第一圖）

新羅の都城に關しては三國史記雜志地理の部に曰く、

初赫居世二十一年、築宮城號金城、婆娑王二十二年(西曆紀元百一年)於金城東南築城號月城、或號在城、周一千二十三歩、新月城北有滿月城、周一千八百三十八歩、又新月城東有明活城、周一千九百六歩、又新月城南有南山城、周二千八百四歩、始祖已來處金城、至

後世多處兩月城、

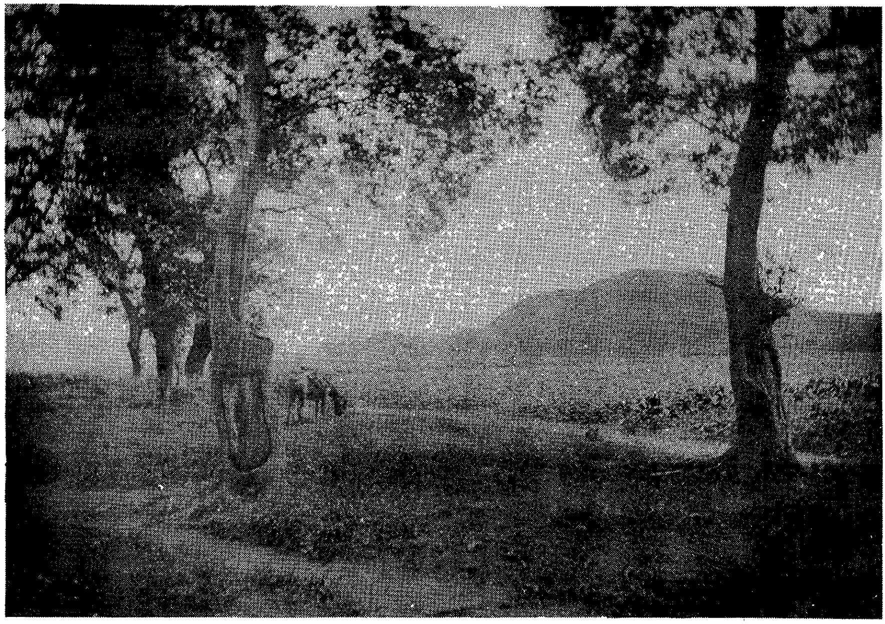
余は此等の中唯月城を見しのみ金城滿月城の遺址は湮滅して明かならす今西文學士の調査によれは鰲山の北に連なれる南山の上に今猶南山城の周壁の廢址を存せりと云ふ。

月城は東京雜記に

月城　在府（慶州）東南五里、婆娑王十二年（二十二年の誤）辛丑築、形如半月、故名、或稱在城、土築周一千二十三歩、輿地勝覽周三千二十三尺、秋王移居于此、…儒理七年庚戌大水、月城頽毀、八年辛亥補築、炤智九年丁卯葺之、十年戊辰移居于此、

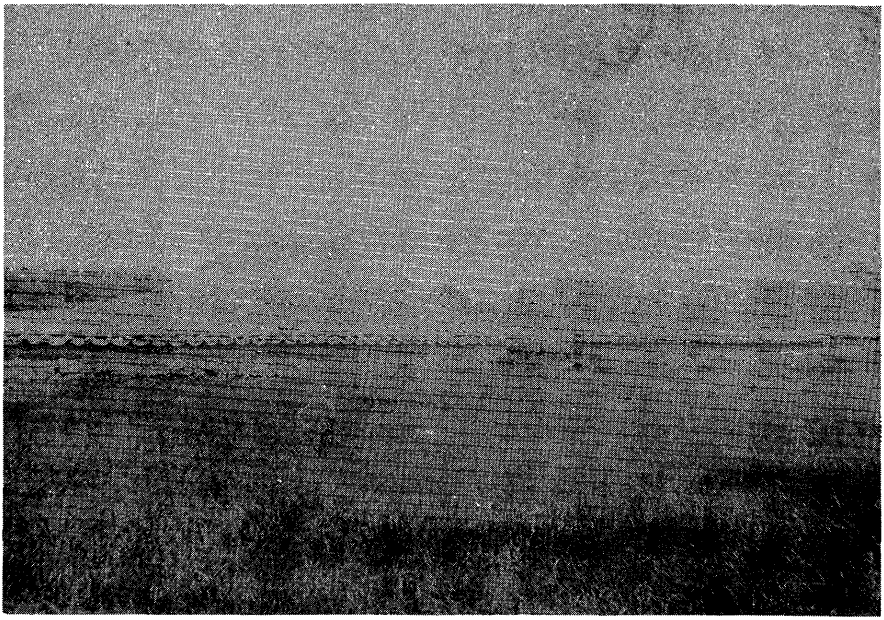
と以て其廣袤と沿革の大要を知るへし城址は南川の北岸に臨み半月狀をなせり土を以て築きし者にして高低參差相連り高凡五六間より十間許一面の長約七八町もあるへし內部の地盤は外面より頗高し蓋當初の城壁は今見る所よりも猶高く上面は高さ相均く更に胸壁の如き者を築きたりしならん內部には王宮を初め附屬の官衙を建てし者なるへく且四面に城門を設けしならんも今すへて此等を徵すへき形迹を發見せさりき。

此城壁中に氷庫の跡あり花崗石を以て築造し上は穹窿狀をなせり入口の楣石に「崇禎紀元後再辛酉秋八月移基改築」と刻せり崇禎紀元後再辛酉とは朝鮮英祖の十七年（西暦紀元千七百四十一年我寬保元年清の乾隆六年）に當る蓋朝鮮は仁祖の時清の大打擊を受け城下の盟をなし其正朔を奉することゝなりしも心常に明を忘るゝこと能はす金石文に



雞林ヨリ月城ヲ望ム

第一圖



五陵

第四圖

は多く明の最終の年號崇禎を永く襲用し崇禎紀元後何年若くは幾干支等と書するか或は單に上之何年と書するを常とせり此銘文により此氷庫は當初新羅朝に築造せし者を英祖の十七年に移轉改築せし者なることを知るを得たり其果して當初のまゝなりや否やは疑問に屬するも大體の構造は大差なかるへきか。

因に曰ふ第一圖の寫眞は雞林より月城の遺趾を望む所なり雞林は始め始林と稱す改名の理由幷ひに雞林を以て國號となせし來歷三國史記に出つ曰く

(脫解王)九年春三月王夜聞金城西始林樹間有雞鳴聲、遲明遣瓠公視之、有金色小櫝、掛樹枝、白雞鳴於其下、瓠公還告、王使人取櫝開之、有小男兒在其中、姿容奇偉、上喜謂左右曰、此豈非天遺我以令胤乎、乃收養之、及長聰明多智略、乃名閼智、以其出於金櫝、姓金氏、改始林名雞林、因以爲國號、

四　陵墓

慶州の附近は大小の墳墓甚た多く累々相望む其新羅時代の者と思はるゝは殆皆平地に築かれ山腹若くは丘陵に據れる者極めて稀れなり此點に就きては我國上代の陵墓に近く高麗朝以後好て山腹若くは丘陵を選める者と相反せり蓋麗初より風水の說特に重んせら

れ陵墓の地を選定することゝ頗面倒となりたれとも新羅時代には猶かゝることなく舊慣により平地に築造せし者ならん。

陵墓の形は十中八九は圓錐體なり稀には半截瓢形をなせる者もあり此點は我上代の者と相似たれとも彼には前方後圓若くは周濠を有する者は一も發見せさりき一般に後世の者よりは規模壯大にして大なるは高五六十尺に及ふ或は孤立せる者あり或は互に接近して群をなせる者あり慶州を西に距る一里許毛梁と曰へる處に數十の圓塚簇立せり恐くは羅朝の築造にかゝれる者ならん土人曰ふ此等の一に曾て新羅三寶の一たりし金尺を藏せり盜難若くは外國の掠奪を避けんか爲め故らに此の如く多數の圓冢を築きたるなりと附會の說信すへきにあらされとも猶墳墓の多數か一群をなせるの狀を想見するに足れり。

此等の陵墓の內部の構造は終に調査の機を得さりき今西文學士其二三を發掘して研究を試みられたれは余は此には徒に想像說を述ふるを避け詳細は同氏の報告に讓らんと欲するなり。

副葬品に就きては余は種々の土器を見たるの外他の者を知らす其土器は各種の形狀を具へ其質堅緻にして火力の爲往々土の熔けて外皮をなせる所或は好て波紋を作れる所形狀と曰ひ手法と曰ひ殆我古墳より出つる者に一致せり（第二圖）吾人は陵墓の形狀と此等の副葬品を見彼我の間必親密なる關係を有せし者ならんとを信せんと欲するなり而る

に支那に於ける漢魏六朝の古墳墓を見るに其多く平地に起せるは同樣なれごも彼は多く

第二図　新羅時代古墳発見土器

方臺形を用ゐ且此の如き副葬品を出すこごなきを以て見れは人種の關係上新羅は我に親密にして彼に疎遠なるこごを示す者の如し。

新羅朝の陵墓にして特に研究に價すへきは五陵、太宗武烈王陵、金庾信墓、掛陵等なれごも余は唯前二者を見たりしのみ。

（イ）　五陵

（第三、第四圖）

五陵又蛇陵ご稱す慶州を南に距るこご半里許の處にあり前面に石碑あり題して

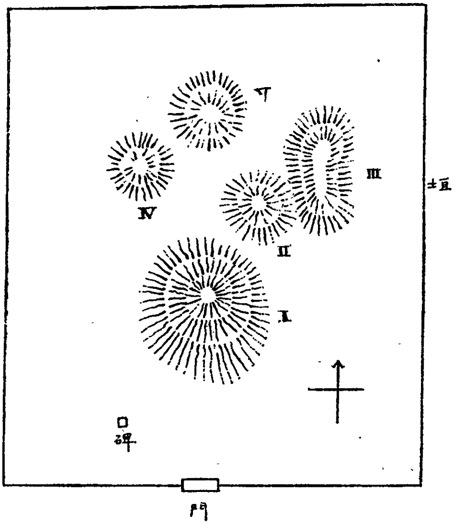
新羅　始祖王　始祖王妃
南解王　儒理王　婆娑王
五陵

と曰ふ碑陰に崇禎後五辛未正月日立とあり（崇禎後五辛未は今帝の八年に當る）即新羅の始祖赫居世及其妃并ひに第二世南解王第三世儒理王第五世婆娑王の陵となすなり三國史記に

赫居世　葬蛇陵、在曇巖寺北、
南解王　葬蛇陵園內、
儒理王　葬蛇陵園內、
婆娑王　葬蛇陵園內、

と載せたれは赫居世は蛇陵に葬り他の三王は其園內即塋域內に合葬せし者の如し而も始祖王妃の陵處に就きては一も記載なし而るに三國遺事には

第三圖　五陵平面圖



王（赫居世）升于天、七日後、遺體散落于地、后亦云亡、國人欲合而葬之、有大蛇逐禁、各葬

五體爲五陵、亦名蛇陵、曇巖寺北陵是也、

と記せり蓋蛇陵は比較的古代よりの名稱なり五陵とは園内五基の陵あるにより後世の文人漢の五陵の故事に倣ひかく呼ひし者なるへく五陵と稱するよりして五體散落等の說を附會せし者ならん。

東京誌刊誤（櫂(近)以鎭尹慶州時作）に曰く

東京記所謂升天云者、非白日升天、而昇遐之稱也、七日五體散落云者、王薨七日王妃殂落之誤也、各葬云者、欲以始祖與王妃合葬、而因蛇妖遂爲各葬也、五陵云者、並二聖陵及南解儒理婆娑三王、而後人通稱五陵、若漢之五陵者、的然無疑矣、

說き得て頗要を得たるか如し或は曰く中に就き二大冢は則二聖の陵他は小に過く王陵の如くならすと土人語て曰第一陵は赫居世第五陵は妃第二陵第四陵は其子女第三陵は其愛馬なりと是れ固より齊東野人の言信するに足らさるなり蓋二千年前の事滄桑數變す此等の陵果して始祖王以下の者なりやは既に疑問に屬す後世彼地の學者連りに論議を鬪はすも到底之を確認するの道なきなり余は唯羅朝初世の陵墓の標本として研究するを以て滿足せんと欲するなり。

五陵は名の如く五基ありて第一陵最南にあり最高く且大なり其高約六間斷面半圓狀をなし前方稍緩なり第二陵は其東北にあり高約五間第三陵は其東にありて後方に稍長く瓢

形をなす高約四間第四陵は第一陵の西北に少く離れて立ち高約二間第五陵は第一陵の正北第四陵の東北にありて低く最高僅に約一間に過きす。

此等の陵を見るに頗我國上古の陵制と相似たり即ち其形の圓形若くは瓢形なると其位置の平地にあるとは人をして彼我多少の關係あるにあらさるかを疑はしむ塋域の周圍には低き石垣を繞らし南面に小門を設けたり是れ蓋後世の築造なるへし。

(ロ)　太宗武烈王の陵　(第五、六圖)

太宗武烈王諱は金春秋新羅不世出の英主にして唐と連合して百濟を滅し遂に三國統一の基を開けり在位八年龍朔元年六月(西曆紀元六百六十一年我齊明天皇七年)薨す永敬寺の北に葬れり今慶州の西南西岳里にある所の陵即ち是れなり大東金石書續に曰く、

武烈王碑　在慶州、金仁問書、唐高宗龍朔元年辛酉立、羅文武王元年也、

とされは此陵は太宗薨去の年に築かれ碑も亦同時に立てられし者なるへし銘字は太宗の第二子金仁問の書たりしは明かなれとも今僅かに篆額のみを存し碑身を失ひたるは惜むへし。

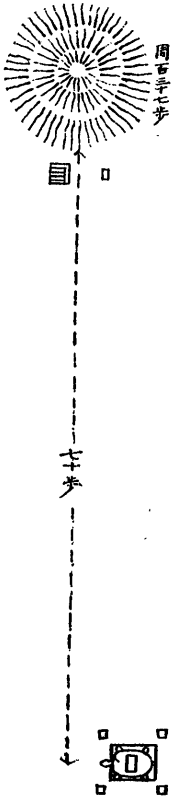
陵は東面し第五、第六圖の如く圓錐狀をなす基周約三百四十尺高約四十尺其前東に距ると約百七十尺にして稍北に偏して碑あり碑は今龜趺と螭首とを存するのみにして其中間銘文を刻せる所の碑身を失ひたり輿地勝覽載する所の曹偉の詩に「斷碣臥荒草、昂然

太宗武烈王陵

第六圖

同上碑

第七圖



第五圖　太宗武烈王陵平面図

見龜首、……摩挲讀碑文、缺落難實究」と曰へるを見れは當時此碑身か仆れて荒草の間に横はりしことを見るに足れり今猶龜趺の背上に此碑身を受くへき枘穴を存せり。

螭首（第七圖）は六龍相背きて蟠結し以て輪廓をなし表裏にある者各後足を擧けて寶珠を捧くるの狀をなす中間に篆額あり「太宗武烈大王之碑」の八字を二行に陽刻せり（第八圖）是亦恐くは金仁問の書なるへし蓋碑に螭首を冠することは支那にありては既に六朝時代に行はれ唐初に於て始めて雄麗精美の極に達せり第九圖示す所の清國醴泉縣九嵕山下唐温彥博碑以て一般を知るに足れり此螭首明かに唐制を摸したる者なれとも同時代の彼の者に比すれは稍奇古渾樸の趣あり。

龜趺（第七、第十圖）は大なる長方形の基石の上にあり頭部四脚の手法頗寫實の妙を極め雄麗見るへし特に項及頷下に刻める寶相花文は優美にして實に唐式の精髓を傳へたり背甲には所謂龜甲文を刻み周緣に飛雲文を配せり背の中央部に蓮坐あり以て碑石を受く

るの地を作す蓮瓣の內面には簡單なる唐草模樣あり此等の雲文唐草模樣は亦唐式に據れる者にして大に我寧樂時代の者に酷似せり蓋此龜趺は固より唐制に出てし者なれとも雄麗の氣象精錬の技工啻に韓國此種の遺物中にありて最優秀なる者たるのみならす支那に於ても之に比肩すへき者殆稀れなり余は淸國內地に於て實に幾十百の龜趺を見たれとも古今を通して之に接踵すへき者は竟に發見せさりき醴泉縣九嵕山下唐李勣墓前の碑の龜趺（第十一圖）は初唐に於ける大作なれとも到底之に比することゝ能はさるなり羅初技術の進步以て見るへし其材料は堅緻なる花崗石より成り千二百餘年の風霜を經て猶摩損せす彫琢比較的に鮮明なるは珍とすへし今此碑の大さを測るに、

螭首廣　四尺八寸

高　三尺六寸五分

厚　一尺一寸

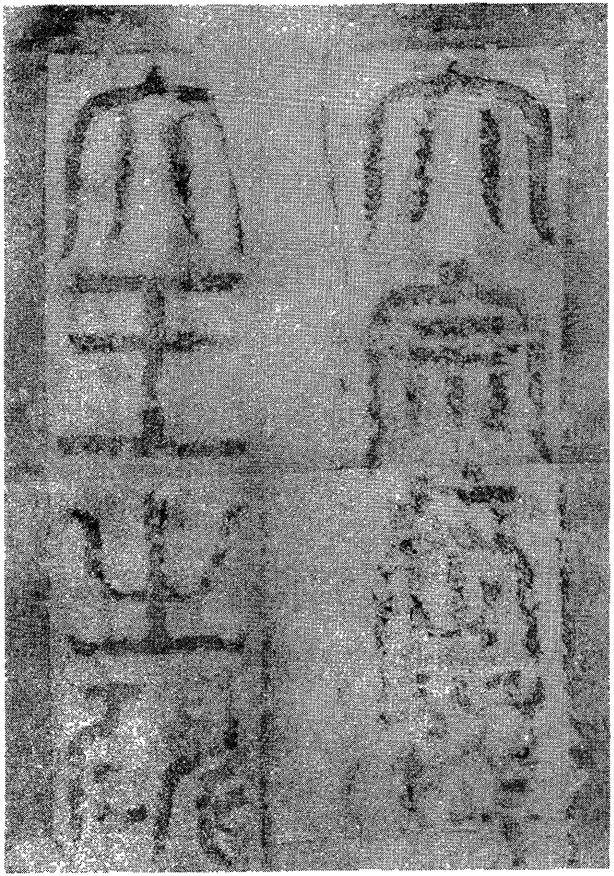
龜趺廣　八尺四寸

長（頭より尾に至る）　十一尺

高（脚下より碑石下まて）　二尺八寸六分

其偉大此の如し碑身若し存せは其壯觀如何そや惜むへきの至りなり碑の四隅に今柱礎を存せり蓋當初碑閣の遺址ならん。

太宗武烈王碑篆額

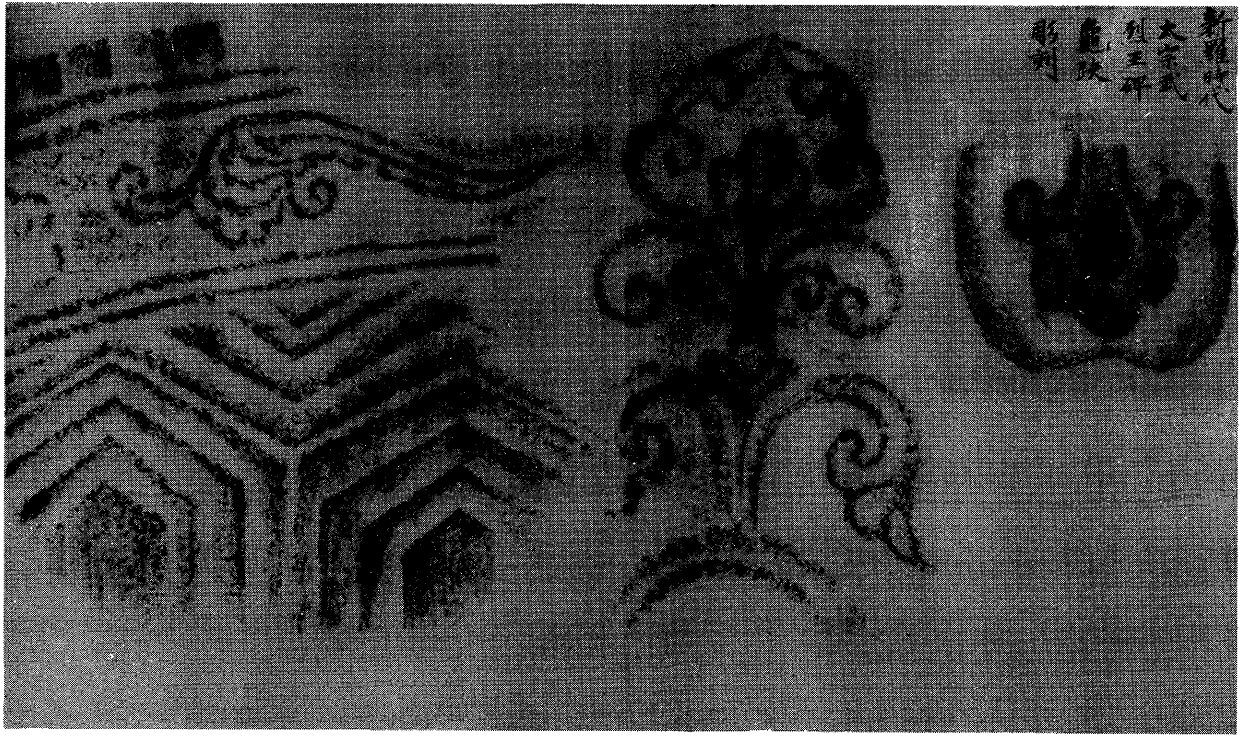


第八圖

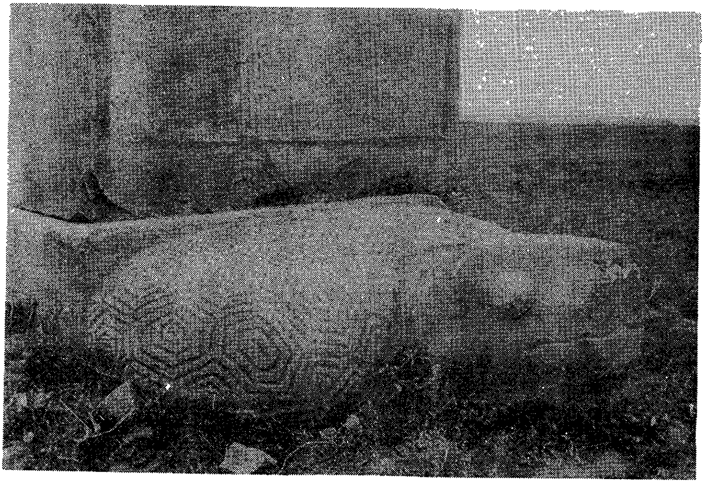
唐李靖碑

第九圖

太宗武烈王碑龜趺彫刻文樣



第十圖



唐李勣碑龜趺

第十一圖

芬皇寺九層塔

第十二圖

五寺院

法興眞興の二王佛法を興隆せしより新羅の終に至るまで歴世佛敎を信奉し多數の大伽藍都城の內外に建立せられたり其最も著はれし者は興輪寺皇龍寺靈妙寺栢栗寺芬皇寺奉德寺佛國寺等にして特に皇龍寺の九層塔は其最偉麗なる者にして鐵盤已上高四十二尺已下一百八十三尺ありしと云ふ此等大伽藍も李朝佛敎の衰頽に伴ひ漸く荒廢せしのみならず壬辰役の慘禍に逢ひて其僅に殘存せし者も多くは兵燹に罹り亂後再興を得し者十の一二に過ぎず新羅高麗兩朝に於ける優秀なる遺物は蕩然地を掃て盡き唯空く兩三の古塔數軀の佛體を剩すのみ余は慶州附近に於ては僅に芬皇寺栢栗寺佛國寺を觀たるに過ぎず他は探撿の暇なく割愛せしを以て此には此三寺院に就き調査せし所を記述せんと欲す。

(イ)　芬皇寺九層塔(第十一圖)

芬皇寺は慶州城の南半里許にあり今石築の古塔一基幷びに小佛寺小僧房を存するのみにして荒頽最も甚しく當初の規制を考ふへからず三國史記には其創立を善德王の三年(西曆紀元六百三十四年唐太宗貞觀八年我舒明天皇六年)となせり東京雜記嬌省勝覽輿地勝覽皆之に從へり此塔亦恐くは當時に成りし者ならん東京雜記に曰く、

芬皇寺塔新羅三寶之一也、壬辰之亂賊毀二其半一、後有二愚僧一、欲二改築一、又毀二其半一、得二一珠一、形如二

碁子、光似水精、擧而燭之、則洞見其外、太陽照處、以綿近之、則火發燃綿、今藏在栢栗寺、是に由るときは此塔は當初は九層なりしも上部を失ひて今僅かに三層を存せるのみなり基壇は元來石築なりしも今悉く破壞せられ大小の石材其周圍に散亂せり其殘存せる形迹によれは壇上積なりし者の如し塔身は基壇の上に立ち其地覆石は花崗石を以て造り其上は悉く褐黑色の小石材を以て築造せり此小石材は長一尺二寸乃至一尺八寸厚二寸五分乃至三寸(廣不定)許なるを以て殆塼築の如し蓋此石材は一種の安山岩にして凡四五分許りの厚さに剝離し易きを以て堅緻なれとも此の如き大さの石材を造るにはあまり困難を感せさりしなり。

塔身初層の大さ方二十一尺四寸五分高さ地覆石上八尺六寸あり而して此高さを三十四段に分つ軒は石材を遞次に出すこと七返以て其形を成せり第二層第三層は漸く大さを減し且高さも甚低し是れ層々其大さと高さとを減し以て安定莊重の觀を生せしめんか爲めなり。

初層の四面には入口狀を作り各兩側に長方形の大なる石を立て其上に楣石を載す但西方には石扉を設け上下に作り出せる軸廻しにより開閉すへし內部は方約五尺今大に潰頽せり入口の兩側の廣き石面には何れも仁王の像を半肉彫に刻み出たせり(第十三圖)其狀頗雄健にして唐式の特徵をあらはせり。

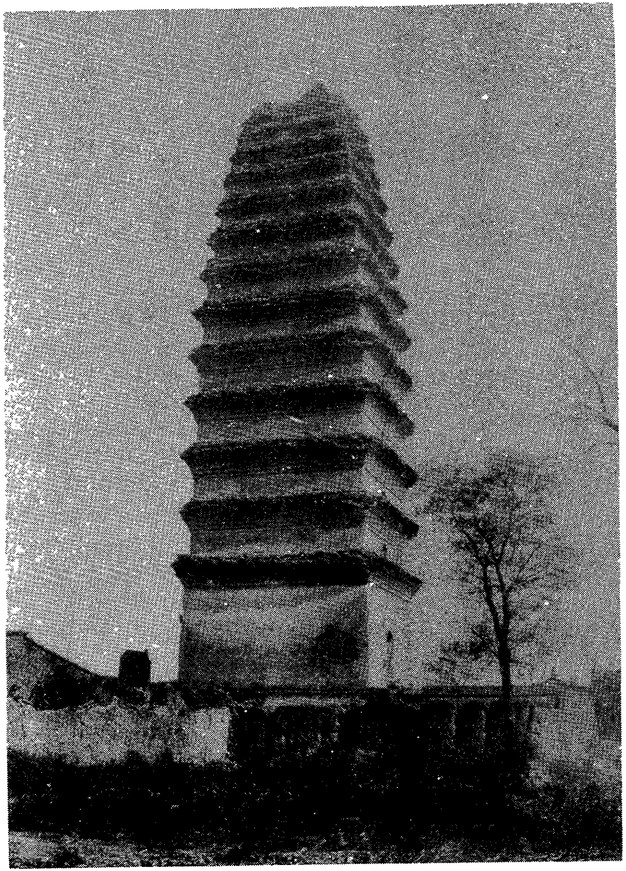
芬皇寺九層塔仁王像

第十三圖

同九層塔下石獅

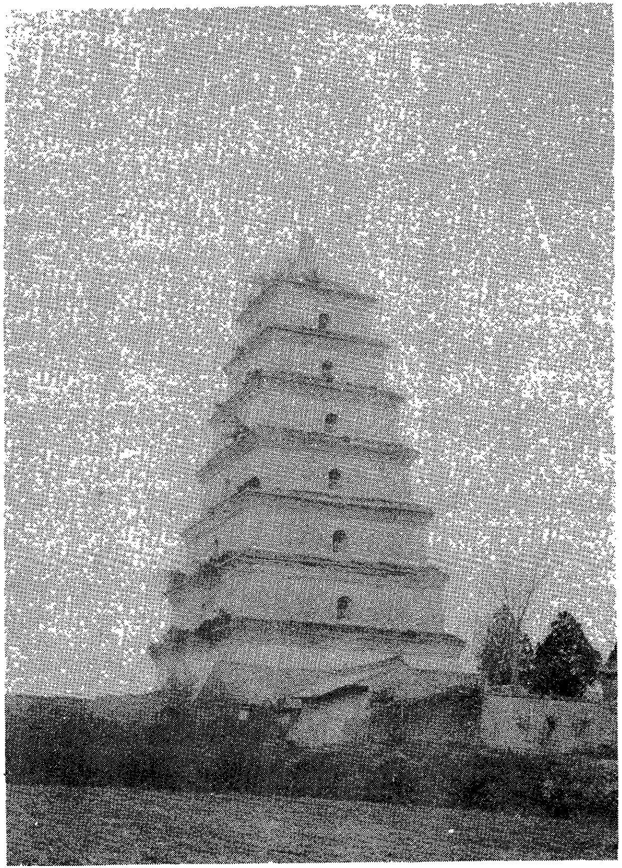
第十四圖

薦福寺小塔（清國陝西省西安府）



第十五圖

慈恩寺大雁塔（清國陝西省西安府）



第十六圖

塔の四隅に石造の獅子を安す（第十四圖）高さ臺石を除き四尺許狀貌甚雄偉なり蓋當時此種の彫刻の好資料なるへし。

今此塔を見るに明かに石材を以て支那の磚築の者を模せしなり其構造は清國西安府の南にある薦福寺の小雁塔（第十五圖唐の建立か）に似て其各層減殺の度の稍多きは同府南門外十清里に立てる慈恩寺の大雁塔（第十六圖唐長安年間再築）に髣髴せり以て此塔か此等と親密の關係あることを知るへし入口左右の仁王像は唐式に據れるのみならす石獅亦唐の特質を具へたり而も初唐の者に比すれは稍雄健簡樸の風を帶ふ。

寺の境內更に石獅二石燈基三礎石若干あり皆羅時の者なり石獅は前記の者より稍小に樣式相同し石燈基は何れも柱下に當れる所に蓮花座を彫み出せり其中二は我寧樂時代初期の風ありて手法甚雄大なり一は之に似て勁健の質を缺く礎石は何れも我寧樂朝の者の如く柱に當れる所を圓形に造り出せり但我に比すれは稍扁平なり。

（ロ）佛國寺

佛國寺は慶州の南四里吐含山中にあり最多く新羅朝の遺物を有せり其草創沿革は今文科大學藏する所の「慶尙道江左大都護府慶州東嶺吐含山大華嚴宗佛國寺古今歷代諸賢繼粧記」に詳かなり今左に其要を摘み古今の變遷を略叙せんと欲す同記に曰く

梁大通二年戊申、新羅法興王二十七年始基下略

陳宣帝大建六年甲午、新羅眞興王三十六年重興、下略

唐高宗咸亨元年庚午、新羅文武王十年創無說殿講華嚴、下略

唐明皇天寶十年辛卯、新羅景德王十年重刱、

新羅孝成王間、有開士、名曰漸開、欲設六輪會於興輪寺、勸化至福安家、安施布五十疋、開祝願曰、檀越好布施、天神常護持、施一得萬倍、安樂壽命長、大城聞之、跳踉而入、謂其母曰、予聽開僧誦偈、云施一得萬倍、念我定無宿緣、今玆困匱矣、今又不施、來世益艱、施我傭田於法會、以圖後報、何如、母曰善、乃施田於開、未幾物故、是日夜國宰金文亮家、有天唱云牟梁里（今浮雲村也）大城兒今託汝家、家人震驚、使撿牟梁里、大城果亡、其日興（恐くは與の誤寫）天唱同時有娠、生兒、左手握不發、七日乃開、有金簡字雕大城二字、又以名之、迎其母於第中、兼養之、既壯好遊獵、一日登吐含山、捕一熊、宿山下村、夢熊化爲鬼、訟曰汝何殺我、我還啖汝、城怖懅請容赦、鬼曰能爲我刱佛寺乎、城誓之曰諾、既覺汁（汗か）流被蓐、禁原野、爲熊刱長壽寺於其地、因以情有所感、悲願增篤、乃爲現生二親、重葺佛國寺、竪塔構橋、爲前世爺孃、刱石佛寺、請神琳表訓二聖師、各住焉、茂張像設、且酬育養之勞、以一身孝二世父母、古亦罕聞、善施之驗可不信乎、將雕石佛也、欲鍊一大石爲龕、善石忽三裂、憤恚而假寐、夜中天神來降、畢造而還、城方枕（三國遺事に枕に作る）起、走跋南嶺、爇香木以供天神、故名其地爲香嶺、將營五百千聖寶殿、不幸惠恭王大歷九年甲寅

十二月二日大城卒、國家乃畢成之、請瑜伽大德（名大賢自號靑丘沙門景德封爲國師）降魔、住此寺繼之、其佛國寺雲梯寶塔雕鏤石木之功、東都諸刹未有加也、（下略）

是に據れは佛國寺の創立は法興王の時にあり眞興王の時重興文武王の時無説殿を建てしか景德王の十年（西暦紀元七百五十二年唐天寶十一載我天平勝寶四年）金大城重刱大に土木の功を起せり今存する所の壯麗なる石塔石橋の屬皆此時に造られし者にして寺の後に創められし五百殿千佛殿は大城歿後朝廷之を竣成し以て其遺志を遂けし者なり（因に曰ふ前記金大城に關する寺記の記事は三國遺事に出てし者に據り多少の補加をなせし者なり）

當時の堂塔門廊僧房に關しては寺記之を載すること詳かなり後の營建にかゝれる者までも數へたるか如しと雖とも昔時の壯大なる規模を窺ふに足るへきを以て左に之を揭く

大雄殿二十五間（階除四偶高八尺四寸圍八十八把各別置梯八歩）東翼廡三間 東多寶塔（四面欄楯莊嚴）西釋迦塔一名無影塔（註略後節に載すへし）八方金剛座臺光明臺一座露柱一座奉爐臺一座 東長廊二十間 西長廊二十間 左經樓三間 各以石柱雕造、芙蓉竪撑憑虛構則、百仞高樓翼如也、 須彌梵鐘閣三間 亦以石雕須彌山形、八角頂築樓、上可坐百八衆、下可建五丈竿、 升天橋一區 南行廊十間 紫霞門六間 靑雲橋 白雲橋 極樂殿十二間 東長廊十八間 西長廊十八間 前後行廊合卅六間 光明臺一座 奉爐臺一座 安養門六間 七寶橋 蓮蓮橋 九品蓮池北有無説殿三十二間 毘盧殿十八間 光學浮圖一座（或云八祖師未知孰是） 奉爐臺一座

觀音殿十六間下略　東行廊五間　西行廊五間　光明臺一座　南行廊十間　海岸門一間　洛迦橋　翠竹樓　綠楊閣

地藏殿十二間　奉爐臺一雙　東西廊廡各五間　南明鏡臺五間　杖錫樓五間　鐵甕門三間　六途門一間　六道橋天人鬼阿傍地

六橋各區十王殿五間　東堂四間　西堂四間　南樓四間　金剛門六間　不二門六間　天王門六間　一柱門三間

十六應眞殿五間　文殊殿五間下略

光學藏講室二十一間所安釋迦繡像一幀及壁獻康大王盡相乃景文朝善畫尼圓海之所筆北寺定公主女也以畫繡稱世第一

東別室五間　西別室五間　祝聖樓七間　光明臺一座　正路門三間　沐室三間　蠍庫十間　凝香閣三間

五百聖衆殿三十二間　東西長廊各十間　趣靜門三間　香爐殿五間

千佛殿二十五間　古傳云、景德王時、釋良志神妙絶比、又善筆札、靈廟寺丈六三尊、天王像、并殿塔之瓦、天王寺塔下八部神將、法林寺主佛三尊、佛國寺一千聖相、左右金剛神等槊、塑の誤か　一路門三間　看星閣三間　山呼樓七間　華藏樓　無碍樓　圓融樓　十玄間五間　萬歲樓二十二間　王子閣　說禪堂

尋劔堂　東別堂　西別堂　淸風寮　明月寮　左右養老堂　內客室　外客室　迎賓寮

送客室　東西湢室　省行堂五間　等四十八房煩不錄、長壽寺祭　熊壽寺祭丹　兩壽寺各安聖像、極致、侈口、表訓神琳浮圖蓮地　金河　玉泉　石槽五座　利刹の誤か竿出三國僧錄遺事及鄕傳

爾後歷朝數修營の事ありしも要するに佛國寺は羅朝の堂塔永く存し當時の佛像莊嚴猶儼然として古代藝術の寶庫たりしなり惜哉壬辰の役一朝兵火に罹り石塔石橋の屬を除くの外殆悉く烏有となれり寺記當時の事を記して曰く

大明萬曆二十一年我

宣祖大王二十六年癸巳五月日、倭寇陸梁、民物處劉之際、左兵使精鋭弓叙移秘于本寺地藏殿壁間矣、倭兵數十輩觀感像設棟樑之美而競奔探翫、及覩兵銃驚駭、曰實花心之有轟也、八人踏殺、百室爕然、哀非秦宮而遽被悍羽之災、何幸此際選科曇華大師遁亂長壽寺、矣、領率門徒奔救大焔、大雄殿極樂殿紫霞門外二千餘間盡付暴燹、其餘金像玉砌石橋寶塔傲焔以脱禍、累　朝綸旨及千樣萬色珍翫寶物盡入於鬱攸之口、可概也已、……

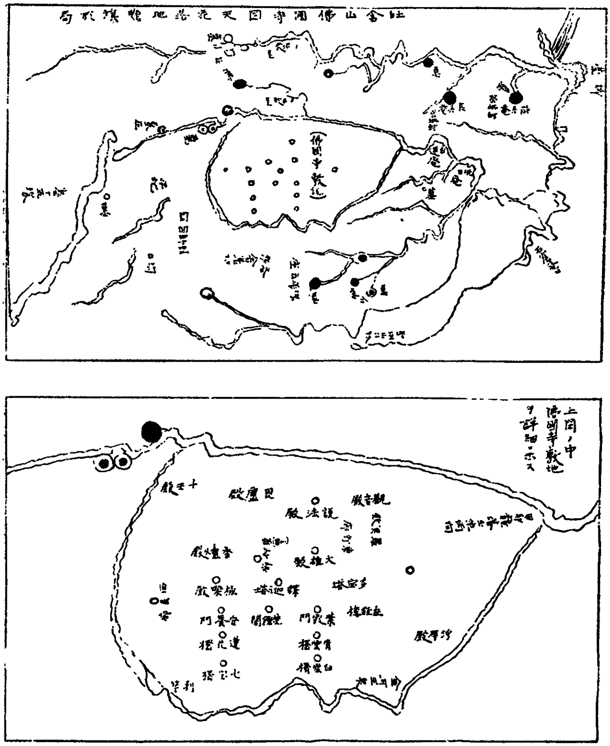
其後漸次堂宇門廊を再興せり即今見る所の者なり寺記之を載せて詳なり今其要を摘み此等建造物再建の年代を擧くれは

觀音殿	萬曆三十二年、
梵鍾閣左右經樓南行廊	同　四十年
安養門滿月堂	天啓六年
東西行廊文殊殿香爐殿	同　八年
紫霞門	崇禎元年
羅漢殿	順治四年
説法殿玄眞堂	同　十五年
大雄殿（寺記寶殿トアルハ此殿ヲ指セルナルヘシ）	同　十六年

毘盧殿	順治十七年
十王殿	康熙十三年

佛國寺古圖

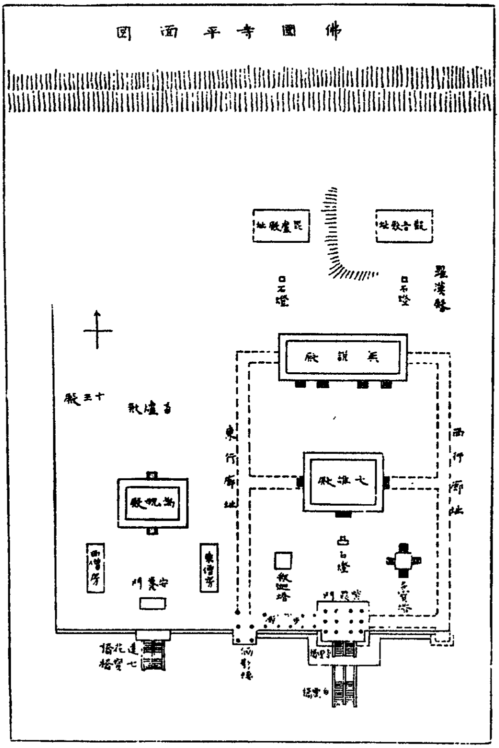
第十七圖



文科大學所藏の佛國寺圖（第十七圖）を見るに伽藍の地域建造物の所在并ひに周圍の地勢の大要を知るに足るへし今や寺運衰微前記再興の堂宇も亦追々消滅し其殘存せる者亦頗壞破す而も尚羅時の遺蹟を存するもの少なからす早く適當の保護を與ふるにあらされは新羅以來の名刹一朝にして廢滅に歸せんこす惜むへきの至りなり。

（イ）伽藍の配置（第十八圖）今堂宇の配置を見るに大雄殿は中央にありて南面し其前面に石燈あり大雄殿の前方東西に石塔婆各一基あり東を多寶塔と曰ひ西を釋迦塔と稱す更に南正面に單層門あり紫霞門と曰ふ門の西に步廊あり其端南に斗折して樓となる涵影

第十八圖



樓と稱す紫霞門の外には石梯二處あり最も奇巧を極む青雲橋白雲橋と稱す更に大雄殿の後方に無說殿あり西方に爲祝殿あり殿の前面左右に各僧房あり正面に假小門あり即古の安養門なり其外に石梯あり奇巧前者に同く規模稍小なり蓮花橋七寶橋と稱す又無說殿の後方に相幷ひて觀音殿毘盧殿の廢址あり其前各一の石燈籠あり。

今日堂宇其他の配置此の如し然れども猶境內を精査することは極めて興味ある事實を

發見すへし即ち紫霞門の東方にも西方の如き步廊の遺址を認むへく礎石依然として存せり更に涵影樓の北方及東方之に對せる所にも步廊の遺跡あり此步廊は更に北行して再內方に向て折れ無說殿の左右側に達して止む又中間別に支廊ありて大雄殿の左右に接せり文科大學所藏の圖に東行廊西行廊と載せたるは此等東西の步廊を指せるなり。

吾人更に此圖を見るに觀音殿の前方東に羅漢殿ありて西面し毘盧殿の西に十王殿あり極樂殿の西に西長廊あり寺地の東南隅に浮屠殿あれとも今此等を徵すへき遺跡を發見せす。

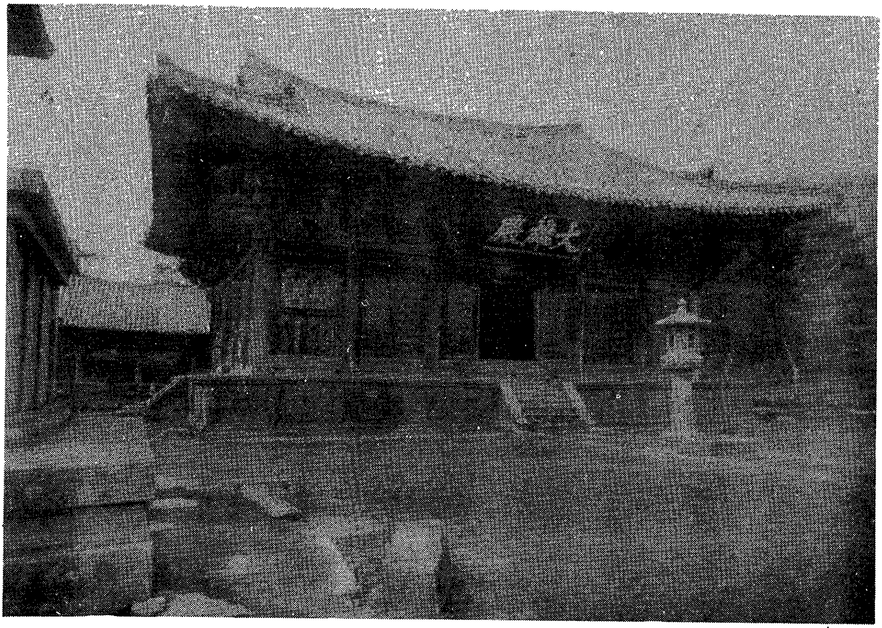
吾人此等伽藍の規模を観先感する所は我寧樂朝の寺院の制度と殆同一なることなり即此紫霞門は我中門の如く大雄殿は我金堂に當たり無說殿は我講堂と位置相同し四面步廊の大雄殿を包容し後方の無說殿に至り更に支廊を以て大雄殿と連結せるは我東大寺興福寺唐招提寺等の配置と頗似たる所あり東西の兩塔か四面步廊內に立てるは我藥師寺の規制と同く大雄殿の前面に燈籠の立てるは我法隆寺藥師寺唐招提寺東大寺の金堂の前面に金銅若くは石の燈籠の立てるに似たり。

吾人是に於て新羅時代の伽藍堂塔の配置は我寧樂時代の者と大差なかりしことを信せさる能はす蓋我寺院の規模は唐制に倣ひし者にして彼亦然りしことは敢て多言を要せさるへし彼此規制の同一なる異むに足らさるなり唯韓國の佛寺は後世禪宗化せられしを以

佛國寺前面圖

第十九圖

佛國寺大雄殿

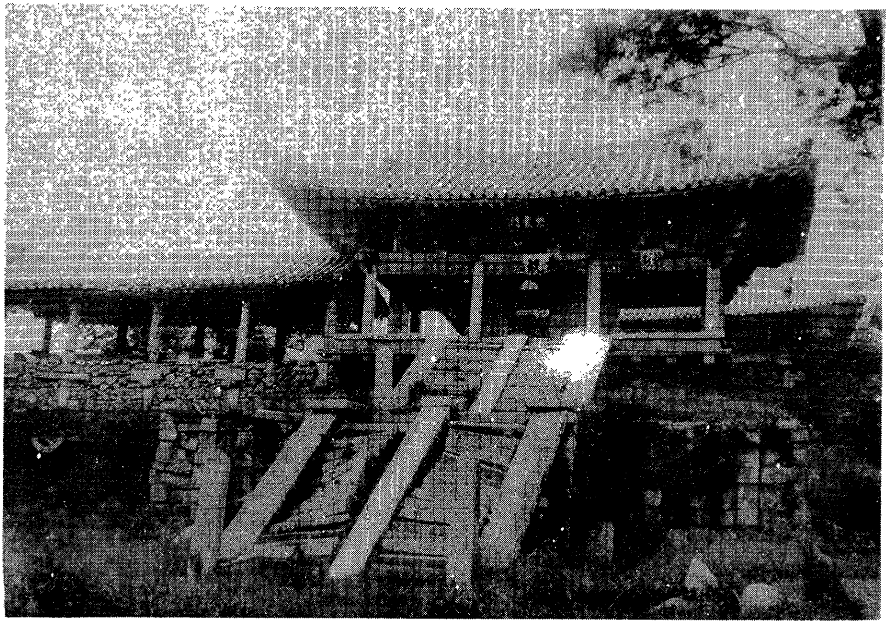


第二十二圖

佛國寺青雲橋白雲橋側面

第二十一圖

同上紫霞門及青雲橋白雲橋前面



第二十圖

て諸堂宇の名稱亦隨て改易せられし者多し吾人は當初伽藍創立の際には必すや今の大雄殿は其金堂にして無說殿は其講堂なりしことを信せんと欲するなり。

（ロ）青雲橋及白雲橋（第十九、二十、二十一圖）寺域は廣き高臺上にありて前面斷崖をなせり正面に石梯二處あり其上に通す上にあるを青雲橋と曰ひ下にあるを白雲橋と曰ふ白雲橋は斷崖に沿ふて石を以て築かれたる中壇に架し青雲橋は此中壇の上に起り以て上壇たる紫霞門の下に達す此中壇の前面に踊場あり三條の石栱によりて支へらる青雲橋の上部亦栱形に下部を作りたる石材によりて支へらる兩橋の左右端及中央に登桁あり少く水垂れを有せり橋の下端左右に石柱あり斷面方形にして上に減殺し圓く頭部を作れり此石柱の下方に高欄の枓束の形を低く彫り出せり踊場の左右端の葛石は比較的廣く薄く上面水垂を有し其端少く反りて下階段の登桁を覆ふ所連絡甚美なり中壇の側壁は大小の石材を以て束狀を交互積み出し手法甚奇なり。

上壇は即ち紫霞門の立つ所の石壇にして葛石と立石とより成り立石の下には板石の屋根ありて壁面より積み出されたる優美なる肘木の列によりて支へらる肘木の下に臺輪あり多くの束によりて之を承く此板石の屋根は多少の反りを有し形狀甚美なり。

此上壇の手法は更に紫霞門の左右の步廊の下にも及ひしか如く處々に其形迹を存せり而も後世の不用意なる修補の爲め殆と見るへからさる者となれるは惜むへし又此步廊壇

の中央部に大なる石造の雨樋あり製作甚奇なり。

（ハ）涵影樓の基柱（第十九圖）　斷面十字形をなし脚部は上稍狹く下廣くして優美なる曲線をなし其上に三重の雲肘木を重ね以て石梁を支承す其全體の輪廓は奇拔にして權衡の秀麗なる此種の者にありては他に比儔を見す吾人は當時の技術家の手腕の卓絶せるに驚嘆せすんはあらさるなり此基柱の下更に壇上積の如き石壇を築けり。

（ニ）紫霞門步廊及涵影樓（第十九圖）　此等は何れも壬辰役後の再興にかゝれる者なれとも大體に於て殆と當初の形狀を示せる者なることは疑ひなきか如し紫霞門は三間三戶單層入母屋造枓栱二手先内部格天井なり其權衡は寧ろ低きに過くるか如しと雖も前面の石梯下より仰き望めは其大小高低恰も適宜の形態をなせり步廊は廣さ一間延長四間簡なる枓栱を有し化粧屋根裏をあらはす其屋蓋は低くして恰も紫霞門の軒下に納まれり涵影樓は正面一間側面二間枓栱三手先屋蓋は入母屋造奇巧なる石基柱の上に立ち單純なる格天井を有せり。

今此等の建造物を通觀するに奇巧なる石壇及石橋は其上に立てる雄麗なる紫霞門穩靜なる步廊奇拔なる涵影樓と上下相待ちて最秀麗なる形態を作り出たせり更に紫霞門の東方にも步廊及翼樓か均勢の位置を保ちて建ちたりしとせは其壯觀果して如何そや我國の寺院の前面に此の如き樓閣の存在せしことを知らす唯宇治の鳳凰堂のみ稍之に似たるの風

趣あり。

（ホ）七寶橋蓮花橋　爲祝殿の立てる地盤は大雄殿の者よりは一段低し隨て其前面の石階段即ち七寶橋蓮花橋も亦小なり其構造略青雲白雲の兩橋に似たり又此橋の架せる石壇及其左右の築造も總て紫霞門及步廊の立てる所と同樣なりしも今大に壞頽せり。

（へ）大雄殿（第二十二圖）　是れ恐くは昔時の金堂ならん五間五面石壇の上に立ち單層屋根入母屋造內部格天井なり今の堂宇は壬辰役後に再興せし者なれは其構造樣式の記述は之を略し唯其平面に就き少く陳ふる所あらんとす。

近世の韓國寺院の堂宇は一般に側面三間なり而るに此殿は五間なり吾人は當初の者亦然りしことを信せんと欲す何となれは我寧樂朝の堂宇亦五面なる者少なからす新藥師寺本堂の如きは其一例なり況んや其殘存せる礎石は花崗石にて作り柱下に當れる所を饅頭形に刻み出し貫下に當れる所亦之れと同高に作り出せるは我寧樂時代の礎石に好て用ゐられし手法たるに於てをや蓋此殿の再建の際當初の平面を直ちに襲用したりしものならん。

（ト）無說殿　八間四面單層屋根切妻造なり一時內部を僧侶の住居として用ゐたりしと見へ多くの室を分ち床下に溫室を設けたり而も今や頽壞甚しく屋破れ軒傾けり此殿は吾人か昔時の講堂と推想する者にして其梁間の四間なるは我寧樂朝に於ける一般堂宇の

平面に同し但桁行の八間なるは異例なり。

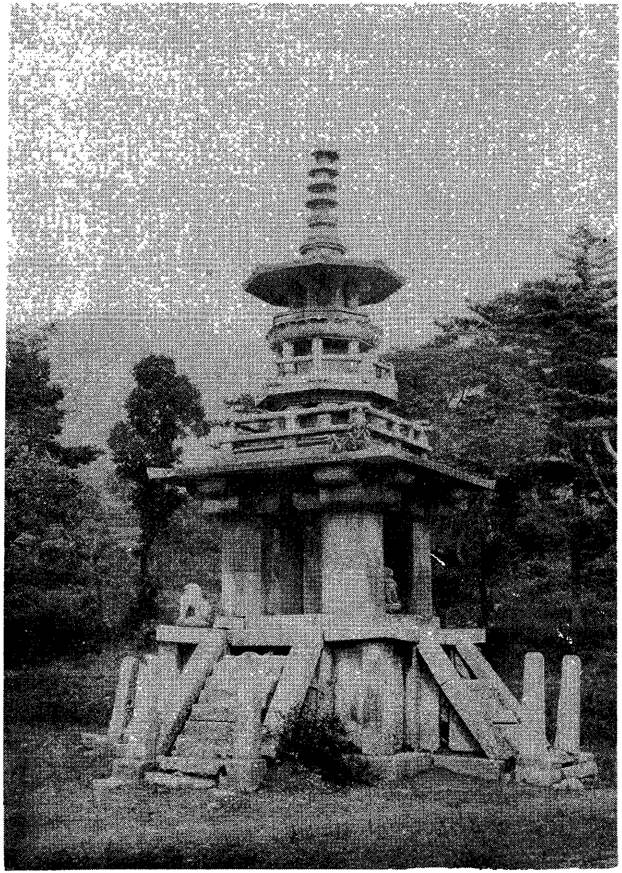
（チ）爲祝殿　三間三面單層入母屋造內部床下に溫突を設く今皇帝の 聖運を 祈る所に用ゐらる此殿は昔時の極樂寶殿なれとも其平面は比較的近世の者に近し。

（リ）多寶塔（第二十三、二十四圖）　今日韓國に遺存せる塔姿中最奇巧を極めし者にして此種の者は今日清國に於ても亦發見せさる所なり基壇は方形にして一面の長さ十三尺三寸五分高約七尺五寸四面に石階各十級あり階下左右に石柱あり斷面方形にして頂圓く其四隅は下より三分の二許の處まて少く面を取り裏面に斗束の形を稍高く彫り出し架木を挿入すへき穴を穿てり蓋當初は登勾欄及四面勾欄を施せし者ならんも今は失はれたり。

基壇の上には初層の塔身あり其四隅に矩形をなせる石柱あり中央に方形の大なる中心柱あり以て上部を支ふ隅柱は地覆石の上に立ち其上端に交叉せる肘木ありて桁を支ふ桁は左右前後互に組合せ其端は肘木と同樣に繰り去れり桁の上には板石を以て作れる屋蓋あり軒付は隅に近き處下端僅に反り上端稍强く反りて多少の增しを有し以て輕快の外觀を得たり隅柱の長五尺二寸五分地覆より桁まて八尺一寸あり。

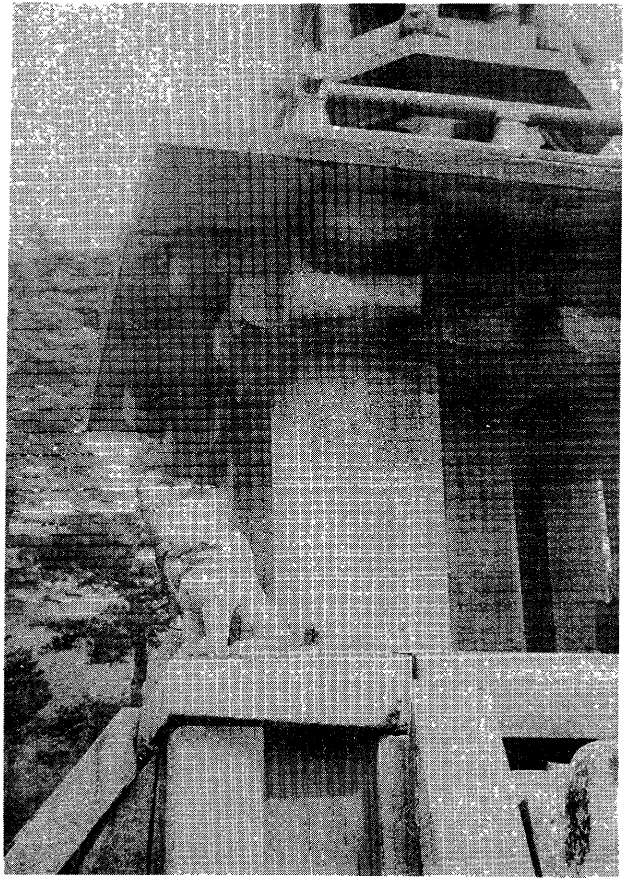
初層の屋蓋の上には第二層の勾欄ありて四面を繞る此勾欄は所謂組勾欄にして其架木及平桁の端短くして反りなく平桁と地覆間に方形の槅子を橫に挿入せるか如き大に我寧樂朝の手法に近し而も斗束の肩部外彎狀の繰形を有せるは我藤原時代以後に於ける實例

佛國寺多寶塔



第二十三圖

同多寶塔の一部



第二十四圖

に近し吾人韓國に於て多數の勾欄を見しも終に此の如き組勾欄は一も發見せさりき乃知る此勾欄の手法は唐制を傳へし者にして我寧樂藤原兩朝の者と互に一致することの偶然ならさることを。

此勾欄の內部には第二層の塔身あり其平面は八角形にして奇形をなせる八本の短柱より成り其上に更に奇なる勾欄を有せり此勾欄の親柱は長方形にして短く頭部圓く稍下に架木を挿篏せり柱下外面に一葉の蓮瓣狀を刻出せり其內部には竹節狀をなせる八本の柱ありて第三層をなす其上再蓮瓣の裡に包容せられたる小墻あり內に珍奇なる八本の柱あり以て第四層部最上層を爲す其屋蓋は優美なる輪廓を見はし軒付の下端は隅に至りて僅かに反り上端は中央部より漸次反りを增し以て輕快の觀を呈せり。

相輪の露盤は八角形にして簡單なる繰形あり覆鉢の上に受華あり其上に三個の輪を作り更に水煙に當れる所に別に奇異なる手法を施せしか如くなれとも今は過半破壞して明かならす寶珠亦缺損して亡し。

基壇の四隅には石獅を安す其狀胸甚た出て頭少く仰く實に純然たる唐式なり芬皇寺の石獅と共に當時の樣式を代表する貴重なる標本なりしか聞く所によれは其中比較的完全なる二軀は其後邦人某によりて我國に將來せられたりと云ふ。

今此塔婆を見るに其權衡の秀麗なる其意匠の豐富なる其手工の精妙なる人をして嘆稱

措くこ能はさらしむ特に堅緻なる花崗石を以て恰も木造建築を見るか如き精巧なる手工を施し千餘年の風雨に暴露して猶能其形體を保てるか如き當時の技術家の技倆の凡ならさるを推想すへきなり。

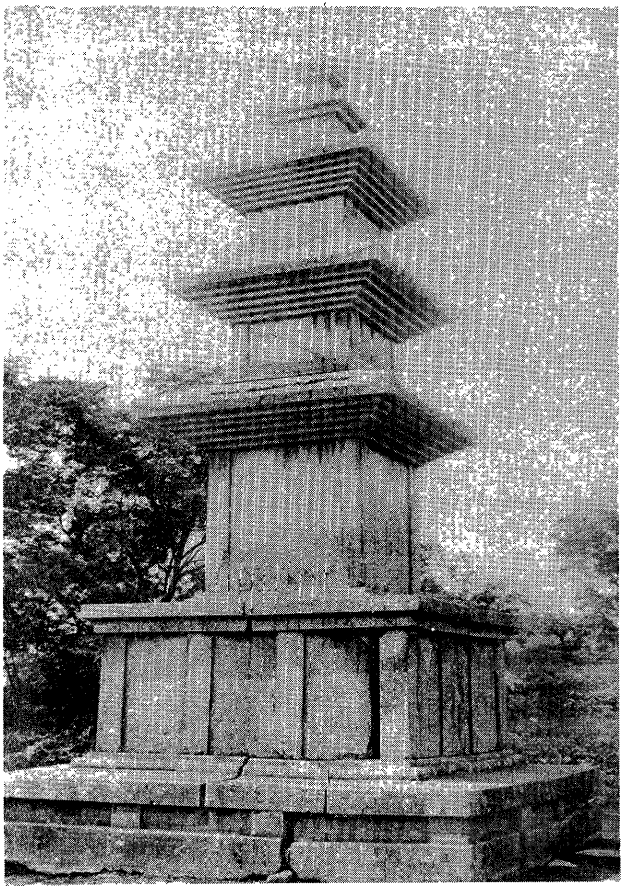
（ヌ）釋迦塔（第廿五圖）一に無影塔こ稱す寺記に其名の來由を説けり曰く

傳創寺時、匠工自唐來人、有一妹、名阿斯女、要訪輙到、通來則大功未完、不可以陋身許納、明日坤方十里許、自天然之澤臨彼、則庶可見矣、斯女依從往見、則果鑑而無塔影、故名之曰無影塔、

此傳説により吾人多少興味ある事實を發見すへし即ち當時造營の際唐より工匠の來りしここなり此傳説多少此等石塔石橋の唐人の手に成りしここを説明する資料に供すへからすや。

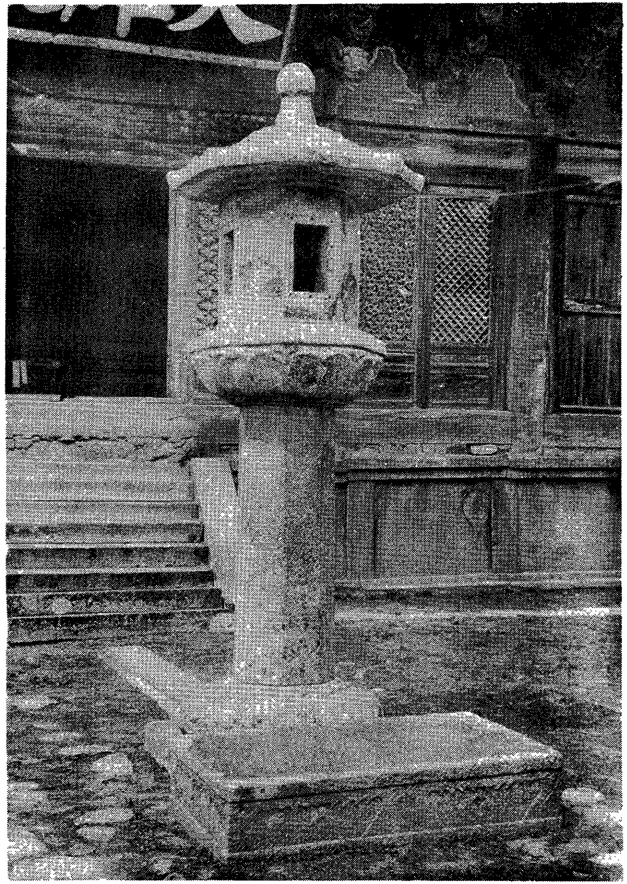
此塔は三層にして二重の基壇の上に立ち頂に寶珠露盤を安んす全高目測約二十七尺あり下壇は低くして堅實に（方十四尺七寸高二尺三寸五分）上壇は高くして稍輕快なり（方十尺六寸五分高四尺八寸）三層の塔身及其屋蓋は次第に其大さこ高さこを減し以て安定の權衡を得んここを勉めたり塔身の四隅には柱狀を作り出し軒は遞次外に出てたる持送りを以て支承し軒付は下端直線に上端反りを有し以て輕快の輪廓を作れり露盤は比較的大なれこも反て全體の諸調を得たり。

佛國寺釋迦塔



第二十五圖

佛國寺大雄殿前石燈籠



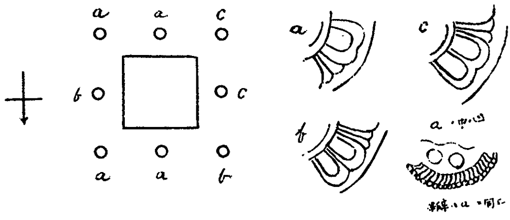
第二十七圖

此塔は手法簡なれごも規模大に全體の權衡最も要を得たり吾人慶尙道の通度寺梵魚寺海印寺等に於て此種の羅時の石塔婆を見たれごも何れも其大さに於ては遠く之に及はす。

此塔の四面に少く離れて八個の柱礎の如き形をなせる石あり(第二十六圖)上に蓮花紋を刻せり三種類あり共に純然たる唐式なり寺僧の言に昔時五層の塔ありて此石塔婆を内に包容せり此八個の石は基礎なりご然れごも之を精査するに今は一個を除くの外表面悉く剝離したれごも其一の蓮瓣の中心に蓮子の形を刻出せるを見れは到底礎石こして使用したる者にあらす或は神聖の區域を表示する爲めに用ゐし者か審かならす。

第二十六圖

釈迦塔周囲蓮花文石図

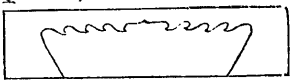


(ル)石燈　大雄殿ご毘盧殿址の前面に各一基の石燈あり又觀音殿址の前にも其礎石を遺存せり大雄殿の前にある者は(第二十七圖)我國の石燈ご形に於て大差なく唯全體の權衡の優雅にして蓋の輕快なるを多こするのみ其基石及ひ火袋下の蓮瓣は唐式にして我寧樂時代初期の手法に同く蓋の輕快なるは奈良春日神社にある所謂柚木形の燈籠に似たり。

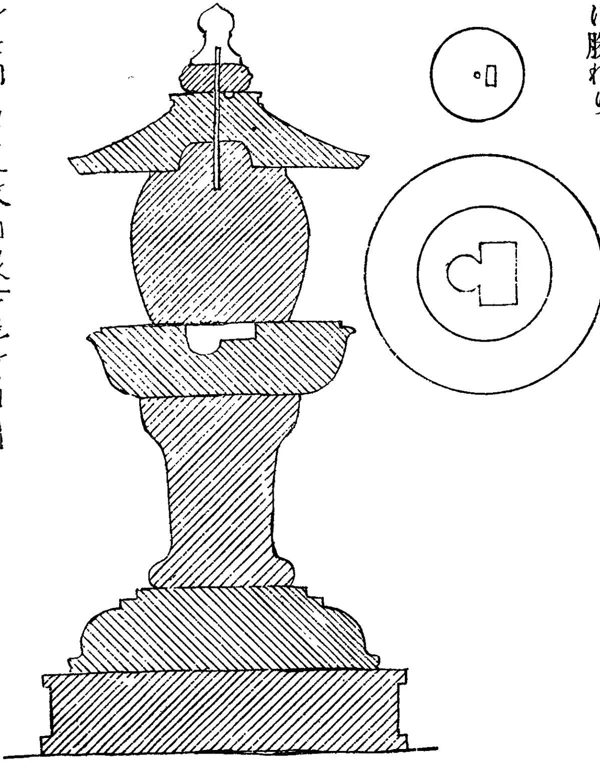
此石燈の前に接して長方形の石臺あり燈火を點する時の踏石ならん其四面に（第二十八圖）の如き格狹間形を彫刻せり其肩の張りて脚の直線に終れるは我飛鳥式の意味ありと謂ふへく其曲線の勁健なるは我唐招提寺金堂佛壇の者に似て之に勝れり。

第廿八図

大雄殿前石燈前ノ石臺



（ヲ）毘盧殿址前の石燈（第二十九圖）吾人韓國に於て見し石燈の中最優秀なる者なり基石は四面に美なる格狹間形を刻み支柱は上大にして下稍減殺し刻するに雄麗なる雲文を以てし其下の蓮坐亦雄大なる瓣を作れり中臺石は下に豐肥研秀なる蓮瓣を刻み出し上面火袋石の下

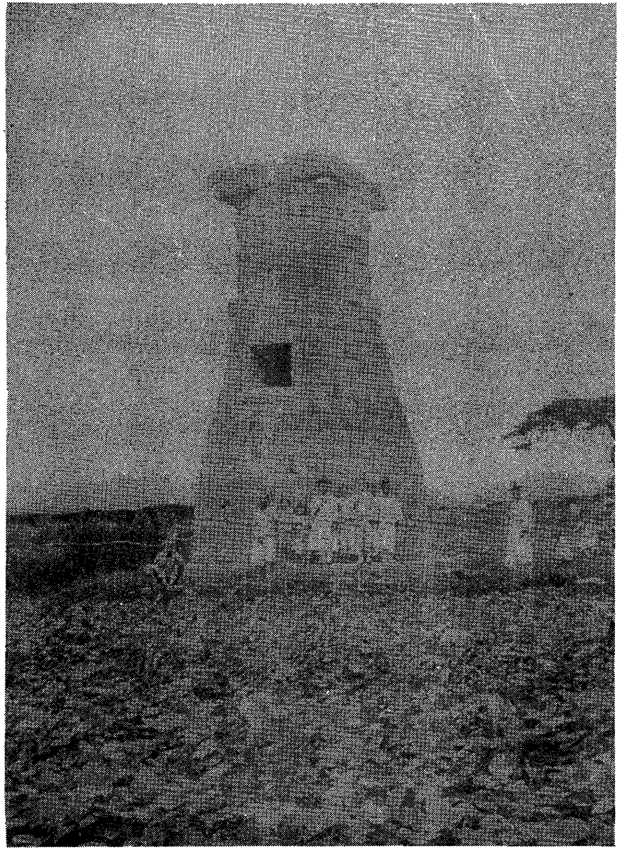


第三十図 毘盧殿前石燈籠断面図

佛國寺毘盧殿前石燈籠

第二十九圖

瞻星臺



第三十一圖

に當り稍大なる穴あり（第三十圖）圓を長方形の側に連結せるか如き狀をなし圓形の處深く長方形の處稍淺し吾人は此穴か何の目的を以て作られし者なりやを知らす恐くは舍利及經卷の如き者を藏せしならん火袋石は胴部膨れて太皷狀をなし上面に長方形に彫り沈めたる小なる穴あり是れ亦何等かの者を藏せしならん周圍三面には佛菩薩の像を刻み上に瓦燈口狀を作り隔つるに柱狀を以てす佛菩薩の像の秀麗なる我寧樂時代の者に髣髴せる所あり瓦燈口及ひ柱に施せる繪樣彫刻亦富美喜ふへし蓋は輕快にして低き露盤を戴き軒は十角形をなし穩かなる曲線より成れり露盤の上に寶珠あり紐狀の者を以て中間を縛せるは奇なり唯其上半部を失ひたるは惜むへし恐くは大雄殿前石燈に見るか如き寶珠を載せしならん寶珠の中心には孔を穿通し蓋を貫きて火袋石の上部に達せり蓋し當初は金屬の杆を以て貫通し以て墜落を防きし者ならん全體の高六七尺許形狀豐美にして佛像蓮瓣雲文等の彫刻頗富麗を極む特に基石を六角形となし支柱下の蓮瓣を八葉となし上の蓮瓣を九葉となし更に蓋を十角形となし故らに單調を破り變化を求めたる意匠の自由頗感賞すへし。

此石燈の火袋にあたれる所は周圍に佛像を彫刻し內部を洞開せされは固より燈火を點する爲の者にあらす恐くは舍利經卷等を藏するの目的を以て作られし者にて或は石塔婆の變態に屬すへき者ならん而も其形は普通の石燈と同樣にして他に恰當の名稱を發見せ

されは姑く此名稱に從ふことゝせり。

韓國寺院の佛殿の前面には石燈を立つることを多し通度寺梵魚寺海印寺等の佛殿前には今尙新羅時代の者と認むへき石燈各一を存せり是れ蓋し少くも唐制に倣ひし者なるへし我寧樂朝に創立せられし伽藍佛殿前には金銅若くは石の燈籠を立つるを例とし今尙一二の遺存せる者あり是れ亦唐制に據りしこと勿論なり而るに淸國にては後世此制全く消滅し余の調査せし範圍内に於ては古今を通して此種の石燈を見しこと一もあることなく我國に於ても當麻寺の石燈を除くの外寧樂時代の者は一も發見せすされは唐式を最よく傳へたる石燈は之を韓國に求むへく就中此石燈は其最傑出せる者なり。

六　自餘遺物

新羅時代の城址陵墓佛寺等の遺物にして吾人の調査せし者は既に前に說きたり此他僅かに殘存せる者は瞻星臺梵鐘佛像及玉笛の類に過きす而も此等零碎の者も亦之を研究せは當時文化の程度技術發達の如何を知り併せて其性質并ひに樣式を卜知するに足るへし。

(イ)　瞻星臺（第三十一圖）

瞻星臺は慶州の東南半里にあり東京雜記に曰く

瞻星臺在府東南三里、善德女主時鍊石築臺、上方下圓、高十九尺、通其中、人由中而上下、以候天文、

善德女王の朝は我舒明皇極兩帝の時金春秋政を攝し制度文物悉く唐制に模せんとせし時に當れり臺基は二重の地覆石より成り上石高一尺下石高地中に入れるを以て分明ならす此基石の上に圓形の平面を有せる花崗石造の高臺あり（鍊石と曰ふは誤なり）下徑十七尺一寸下部は垂直に始まり上に上るに從ひ漸く內に傾き全高の三分の一許の處より傾斜稍急となり三分の二許の處再緩に復し更に頭部は少く外に出つ此の如く壁面の輪廓か彎曲せるに拘はらす使用の石材の外面は常に垂直なり隨て上下層の間に多少の「ちり」を遺せり此等石材の層は總て二十七段あり而して頭部には更に方形に組合せたる石材二層を載す其廣さ凡八尺五寸臺基上より此方形石材の上に至るまて二十九尺一寸あり東京記に高十九尺とせるは尺度の單位の相違による者ならん此建物の南面中央部に小窓口を雜有せり楣石もて其上を支ふ此窓口を入れは內部は空虛となりて上に開けり東京雜記に「通其中人由中而上下以候天文」とあるは之を謂へるなるへし而も其內面は野面のまゝにて凹凸極めて甚し當初恐くは或方法を以て此內面を蔽ひし者ならん更に外部下より三分の二許上に石材を積出したる處四ヶ所ありて當初は柱若くは何物かを支へし者の如し

又頭部に近く八箇所に稍小なる積出しあり此等は如何なる目的に向て用ゐられしか又頭部方形の石材の上は如何なる構造をなせしか今より全く判斷し難しと雖も當時は此の如き瞻星臺を要するまて文化の進歩し石造の建築も頗發達せしことを徵するの好資料となすに足るへし。

（ロ） 奉德寺梵鐘（第三十三圖）

奉德寺の梵鐘は今慶州府南門外鳳凰臺下の鐘閣（第三十二圖）内にあり東京雜記に曰

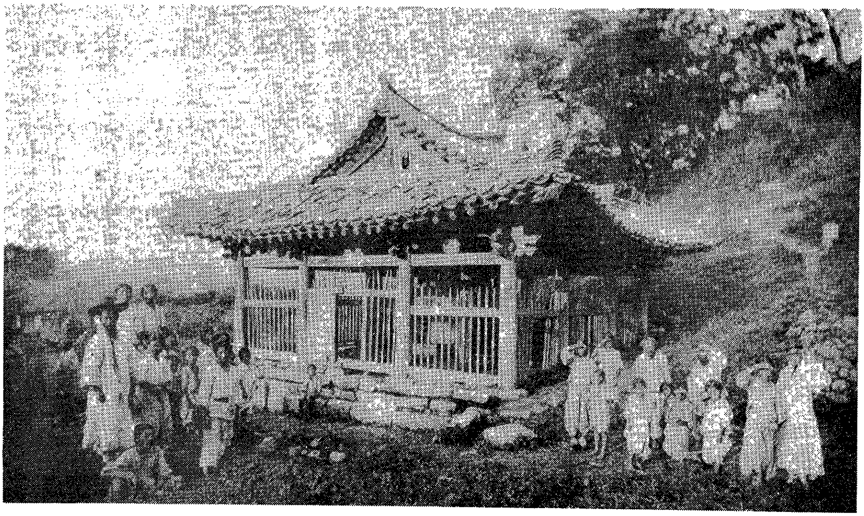
奉德寺鐘、新羅惠恭王鑄鍾、銅重十二萬斤、撞之聲聞百餘里、後寺淪於北川、天順四年庚辰移懸于靈妙寺、……府尹芮椿年移置南門外、構屋以懸、凡徵軍及城門開閉時擊之、

此鐘に大歷六年（惠恭王六年西曆紀元七百七十五年我寶龜二年）翰林郎金弼奚の銘文を陽刻す以て其來由の詳細を識るへし而も今往々摩滅讀み難き所あり海東金石苑東京雜記及輿地勝覽皆此銘文を掲く余今西文學士所藏の拓本を借り比較せしに何れも多少の誤りあり特に海東金石苑最多し而も他の鑄造に關係せし人名及年號を省略せしに反し金石苑は之を詳載せるを以て左に轉載し拓本を以て校正をなせり（但拓本により誤りを正せし者には特に括孤を附して區別せり）

聖德大王神鐘（鍾）之銘　朝散大夫兼太子朝議郎翰林郎金弼奚奉敎撰

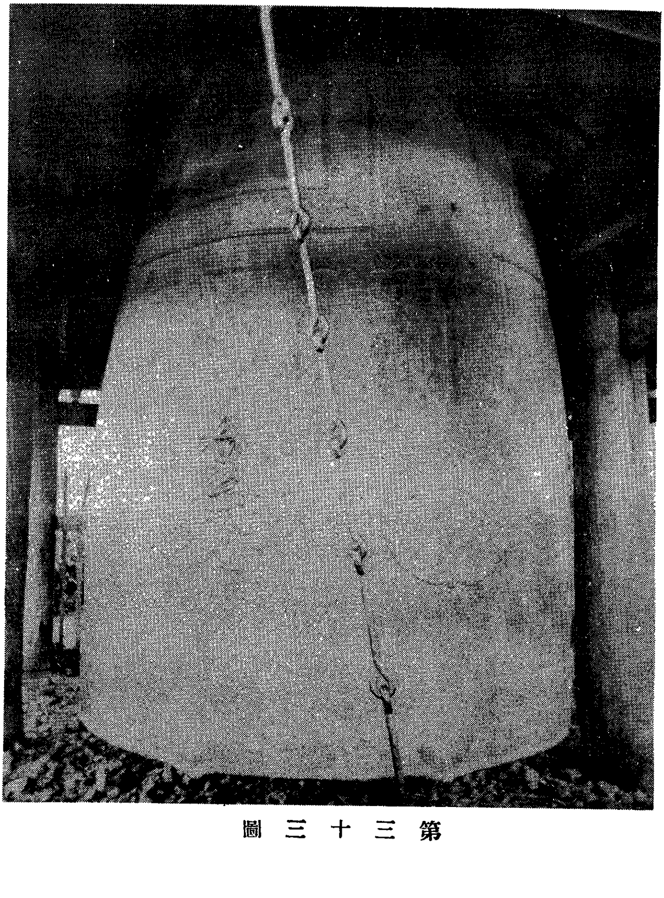
夫至道包含於形像之外、視之不能見其原、大音震動於天地之間、聽之不能聞其響、是

慶州府鐘閣



第三十二圖

奉德寺梵鐘



第三十三圖

故憑開假說觀三貞（眞）之奧載、懸擧神鐘（鍾）悟一乘之圓音、夫鐘（鍾）也稽之佛生（土）、
則驗在於罽膩、尋之帝鄕、則始制於鼓延、空而能鳴、其響不竭、重爲難轉、其體不褰、所以
王者元功克銘其上、羣生離苦亦在其中也、伏惟　　聖德大王德共山河而幷（並）峻、名齊
日月而高懸、擧忠良而撫俗、崇禮樂而（以）觀風、野務本農、市無濫物、時嫌金玉、世尙
文才、不意子靈有心老誠（誠）四十餘年、臨邦勤政、一無干戈驚擾百姓、所以四方鄰（隣）國
萬里歸賓、惟有欽風之望、未曾飛矢之窺、燕泰（秦）用人、齊晋替覇、豈可幷（並）輪雙轡而
言矣、雙樹之期難測、千秋之夜易長、宴（晏）駕已來于今三十四年（年の字なし）也、頃者
　孝嗣景德大王在世之日、繼守丕業、監撫庶機、早隔（缺字）慈規、對星霜而起戀、重違
　嚴訓、臨闕殿而（以）增悲、追遠之情轉悽、益魂之心更切、敬捨（捨）銅一十二萬斤、欲
鑄大鐘（鍾）一口、立志未成、奄爲就世、今我　　聖上（今　　我聖君 勝覽亦上に作れども拓本君字の如し）行合（缺
字）祖宗、意符至理、殊祥異於千古、令德冠於當時、六街龍雲蔭酒（灑）於玉階、九天雷鼓震
響於金闕、草（菓）木之林、離離於外境、非煙（烟）之色、熀熀（拓本不明勝覽には煥々に作る
是に似たり）乎京師、此則投茲誕生之日、應其臨政之時也、仰惟　　大君恩（恩）若地平、
化黔黎於仁教、（勝覽敬に作る是の如し）心如天鏡、奬父子之孝、誠是知朝於元舅之賢、夕於
忠臣之輔、無言不擇、何行有愆、（勝覽僁に作る）乃顧遺言、遂成宿意、尒其有司辨事、工匠盡
模、歲次大淵、月惟大呂、是時日月借暉、陰陽調氣、風和天靜、神器化成、狀如嶽（岳）立、聲若龍

吟、上徹於有頂之巓、潛通於無底之下、見之者稱奇、聞之者受賜、願茲妙因奉翊尊靈、聽
音聞之淸響、登無說之法筵、契三明之勝心、居一乘之眞境、乃至瓊蕚之叢共金柯以永茂、
邦家之業將鐵圍而彌昌、有情無識慧海同波、咸出塵區、幷(並)昇覺路、臣弼奚文拙無才、敢
奉聖詔、貸斑超之筆、隨陸佐之言、述其願旨、銘記于鐘(鍾)也、

翰林臺書生大奈麻金□□書

其詞曰

紫極懸象　黃輿啓方　山河鎭別　區宇分張　東海之上　衆仙所藏　地居桃壑　界
接扶桑　爰有我國　合爲一鄕　元元聖德　曠代彌新　妙妙淸化　遐邇克臻　將恩
被遠　與物需均　茂矣千葉　安乎萬倫　愁雲忽脫　慧日無春　恭恭孝嗣　繼業千(勝
覽には于に作れども拓本を見るに共に非なり讀み難し)機　冶(治)俗仍古　移風豈違
日思嚴訓　常慕慈輝　更以修福　天鐘(鍾)爲祈　偉哉我后　威德不輕　寶瑞頻出
雲符每生　主賢天佐(勝覽亦佐に作れども祐の如し)　時泰國平　追遠惟勤　隨所(心)
願成　乃顧遺命　于斯寫鐘(鍾)　神人(人神)獎力　珍器形(成)容　(能伏魔鬼　救
之魚龍)(金石苑勝覽共に此二句を後に錯入せり)　震威暘谷　淸韻朔峯　聞見倶信　芳緣允鍾　能保魔鬼　救
之魚龍　圓空神體　方現(顯)聖蹤　永是鴻福　恆恆轉重

翰林郞級湌金弼奚奉　詔撰

待　詔大麻奈□□書

(以下上下二層の上層)

撿校使兵部令兼殿中令司馭府令修城府令監四天王寺府令幷撿校眞智大王寺使上相大角干臣金邕

撿校使□政臺令兼修城府令撿校感恩寺使角干臣金良相

(以下下層)

副使執事□□郎阿飡金體信

判官右□(祿)官□汲飡金□得

判官級飡金　□□

判官大奈麻金　□□

錄事奈麻金　□□

錄事奈麻金　□□

錄事奈舍金　□□

大曆六年歲次辛酉（大曆六年は辛亥なり拓本を見るに摩滅辨じ難し蓋酉は亥の寫し誤ならん）

十二月十四日鑄鐘(鍾)大博士大奈□□□□

(次博士)奈麻□□□

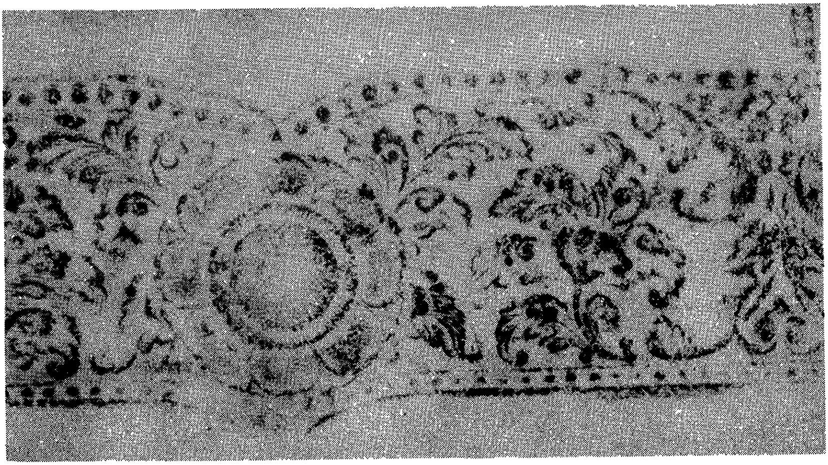
奈痲□韓□大舍□□□

此銘文によれは此鐘は景德王其父聖德王の爲めに銅十二萬斤を捨て鑄造せんとせしも果さすして薨せしかは其子惠恭王遺命を奉し其六年十一月鑄成せし者なり。

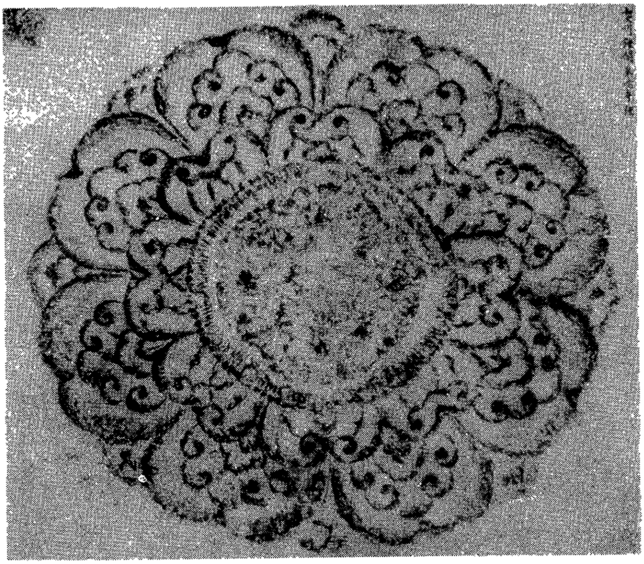
此鐘は口徑七尺五寸口周二十三尺四寸口の厚八寸ありて韓國第一の大鐘なり全體の形狀甚優美にして下緣及上緣に寶相花文を陽刻せり（第三十四圖）此模樣は實に我寧樂朝の者と殆一致し全く唐式に出てし者なり其口は八稜形をなし下緣の模樣は之に隨て走り此稜角に當れる所に蓮花文を作れり蓮房大にして蕋を有せり。

鐘の上部四面には寶相花文を繞らせる方廓あり內に四行三列總て九個の蓮花形を充たせり手法唐初及我寧樂朝の者に似たり撞坐（第三十四圖）は大にして蓮房內に多子を含み周圍に花蕋を作れり瓣は極めて優美の模樣より成れり此撞坐と反對の側に銘文を陽刻せり。

撞坐と銘文との間には飛天をあらはせり（第三十五圖）此像は蓮坐の上に跪きて雲中供養の狀をなす其天衣玉佩の空中に飜りて尤流麗勁勁の曲線を作れると雲文の悉く雄麗なる寶相花より成れるとは實に唐式の精華にして其飛天は意匠我藥師寺東塔水烟に近くして其巧は之に過き其寶相花文雲文は我東大寺法華堂佛體の模樣と親密なる關係を有せり余清國內地に於て多數の梵鐘を見しも其唐代に屬する者僅かに二而も其規摸に於て其



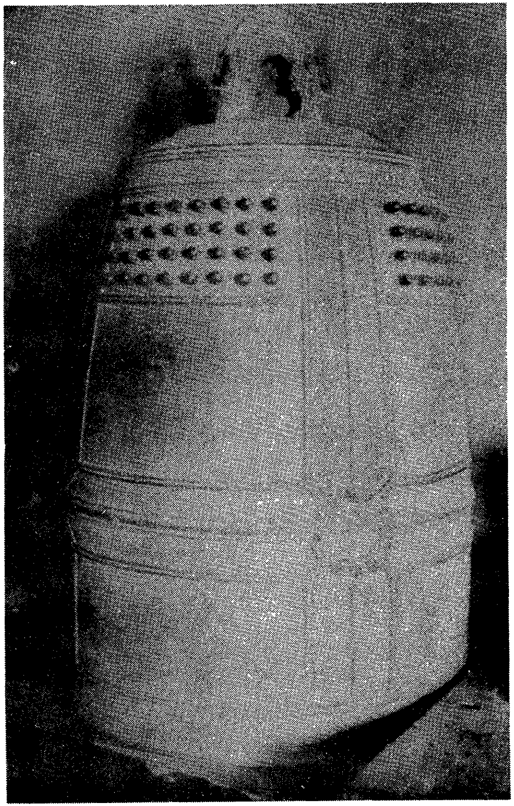
第三十四圖　奉徳寺梵鐘文様



同上撞坐文様

奉德寺鐘陽刻天人

第三十五圖



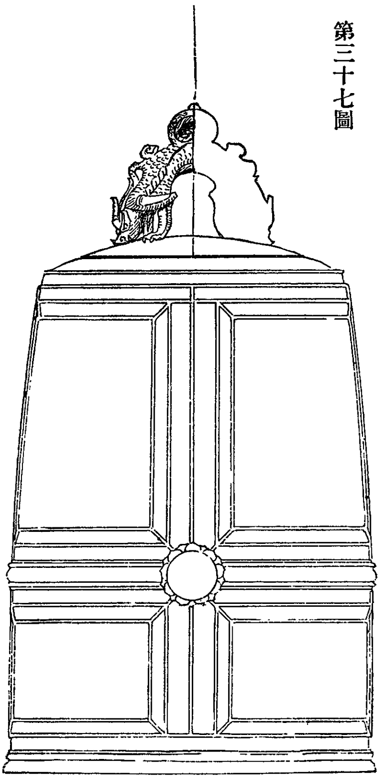
興福寺観禪院鐘

第三十六圖

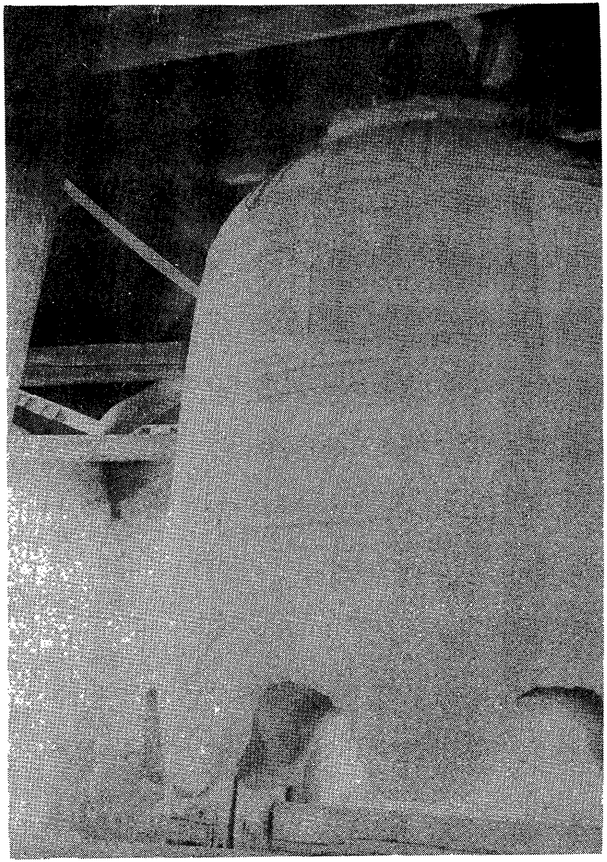
装飾に於て到底此鐘に比すへくもあらす我邦に於ても亦之に比肩すへき者を發見せす實に此鐘は雄麗の氣象精錬の技工日清韓を通して今日に遺存せる最優秀なる標本なり龍頭は恰も組合せたる梁の間にありて下より窺ひ見ること能はす随て普通の龍頭なりや或は所謂旗挿しと稱する圓筒を有せる者なりや分明ならす

今此鐘の様式を見るに普通我國に行はるゝ者とは別種にして我圓滿院鶴林寺尾上神社等にある者と同系統に屬せり然るに其佛像文様等を觀るに純然たる唐式なり其彼れの感化に成れる者たるは明かなり然れとも此鐘の様式も亦彼れを學ひし者なりや否やは須く攻究を要すへき問題なり清國に於ける古鐘は概ね銅製たりしにより歴朝の變亂を閲して殆と全部は鑄潰され今日存する所の梵鐘は多くは明以後の者にして金代に屬する者は余の旅行中僅に陝西省乾州と山東省肥城縣に於て各一を見しのみ而も此等は後世の者と共に鑄鐵製なり實に今日支那の内地に於て銅鐘を發見せんことは困難の事業なり唐に屬するは余の知る所の者は唯僅に西安府と山東省青州とに各一の銅鐘を存するのみ而も余は後者を見るを得たれとも前者は人に示せは疫病の流行を來すとの迷信に妨けられ終に調査することを得さりきかく支那の古鐘に就き僅小なる知識を以て概論するは頗困難なれとも余の見し所によれは青州（眞武廟にあり第三十七圖）の者は撞坐の位置袈裟襷龍頭より全體の形狀に至るまて吾法隆寺東院、妙心寺、當麻寺、興福寺、觀禪院（第三十六圖）

第三十七圖



新藥師寺等にある寧樂時代の梵鐘と殆同樣式にて唯乳を缺けるのみ我國に於ける前記諸寺の梵鐘は無論唐の影響を受けし者なるへけれは彼此互に類似する所あるは當然の事とす乾州鐘閣にある金の泰和二年の鐵鐘（第三十八圖）は前者と少く形式を異にし袈裟襷の割方に少く異なる所あり口邊亦波狀の彎曲線をなせり明清の梵鐘は悉く此形式を踏襲せり而も龍頭其他の點に於て多少唐式の餘影を存せり奉德寺の梵鐘は固より靑州眞武廟の者と同しからす又金以後の支那鐘とも全く形狀手法を異にせりされは此鐘の樣式は今日殘存せる普通の支那鐘と樣式頗る相違せり而も之に反して我邦に於て伊東博士の所謂朝鮮鐘と稱する者と符節を合するか如し即此朝鮮鐘の特徵は（一）龍頭に所謂旗挿しあること（二）鐘の肩と口邊とに廣き唐草文樣の帶を繞らせること（三）上部四面に唐草文の周緣を有せる乳郭を存すること（四）袈裟



乾州鐘閣鐵鐘

第三十八圖

栢栗寺藥師如來銅像

第四十圖

褌なく飛天の陽刻を腰部にあらはせること等にあり此奉德寺梵鐘には旗挿の有無は不明なれとも其他は皆此れと同樣なり余は韓國に於て高麗朝の梵鐘は一も發見せさりしか（開城南門樓の鐘は元の工匠の手に成りしを以て高麗鐘とせす）朝鮮朝の者は多く之を見たり此等は皆所謂朝鮮鐘の系統に屬する者にして純然たる支那式の者は一も發見せさりき此種梵鐘の我國に於ける所在地を擧くれは

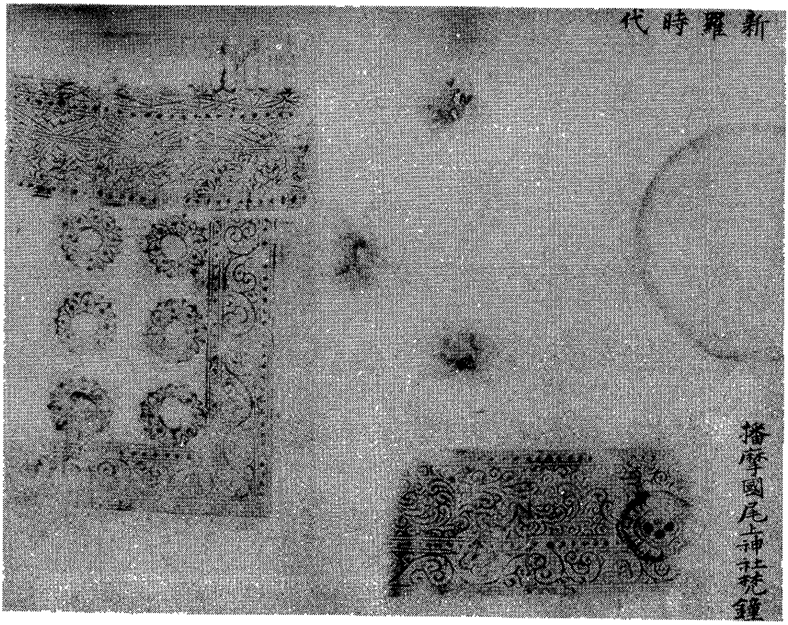
長安寺　（新潟縣佐渡郡）
常宮神社（福井縣敦賀郡松原村）
○圓滿院（滋賀縣大津市）
鶴滿寺　（大阪府西成郡）
○尾上神社（兵庫縣加古郡高砂町）
○鶴林寺（同　同　鳩里村）
觀音院　（岡山縣上道郡西大寺町）
○不動院（廣島縣安藝郡牛田村）
○大願寺（同　佐伯郡嚴島町）
○住吉神社（山口縣豐浦郡勝山村）
天倫寺　（鳥取縣鳥取市）

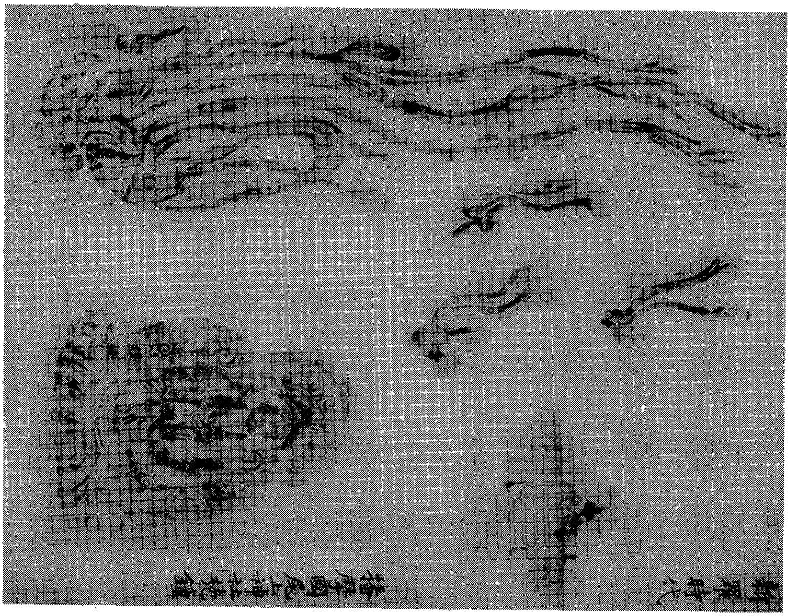
○雲樹寺　（島根縣能義郡宇賀庄村）
○宇佐八幡宮（福岡縣）
○聖福寺　（福岡市）
○承天寺　（同）
志賀神社（福岡縣鹿島）
○日光東照宮（栃木縣日光町）

右の內余の親く見たる者（上に○符を附す）に就き尾上神社の鐘最古く頗優麗なり（第三十九圖）恐くは新羅時代の者ならん其他の多くは高麗時代より新羅朝の初めに屬すへき者なり別に日光東照宮の者は朝鮮より送獻せし者にかゝる吾人此等梵鐘の年代樣式及分布地方の狀態より推して恐くは其多數は倭寇の掠奪し來りし者か若くは文祿役の戰利品ならんと思ふなり。

（八）　佛像

新羅朝佛法の隆盛に隨ひ佛像の製作亦盛にして支那南北朝及隋唐の感化を受けて其技術頗觀るへき者あるに至れり而も此等の佛像は近世伽藍の荒廢と災禍との爲めに漸く烏有に歸し遺存せる者極めて稀れなり慶州附近に於て余は僅に二三軀の銅佛と一區の石佛とを見しに過きす而も此等は皆唐式に屬する者にして南北朝の遺風を傳へて我飛鳥時代



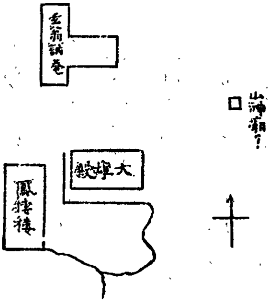


第三十九圖　尾上神社鐘陽刻天人及文樣

の者と連絡する者は一も發見すること能はさりき。

（一）栢栗寺銅造藥師如來立像（第四十圖）　栢栗寺は慶州の北金剛山の中腹にあり其創立は同寺鳳棲樓內揭くる所の栢栗寺重創記（萬曆三十六年記）には神文王の時となせり壬辰の役兵火にかゝり其後大雄殿鳳棲樓玄翁訥菴等を再興せり（第四十一圖）大雄殿內今銅造藥師の立像あり高七尺許全體の權衡宜きに稱ひ面相溫和衣文の線條甚勁健なり其年代は明かならされとも唐式を傳へて多少の異色を帶ふるか如し其製作年代は恐くは神文王まては遡らさるへく次の佛國寺の者に近き者ならん。

第四十一圖　栢栗寺平面圖



（二）佛國寺銅造盧舍那佛座像（第四十二圖）　佛國寺の事は前既に說けり此像は大雄殿の內に安置する所面相雄麗頗優秀なれとも近年黃土色を以て塗抹し且眉眼及口唇等恣に輪廓を描き最拙惡なる補修をなしたれは一見稱贊すへからさる面貌となれり姿勢は能く整ひ手指は太く柔かに我新藥師寺本尊の者に似たり衣文の手法は頗雄麗流暢を極め曲線の性質自由に且强健なり其樣式全然前記栢栗寺の者と符節を合するか如し恐くは羅朝中朝の頃に屬すへき者ならん。

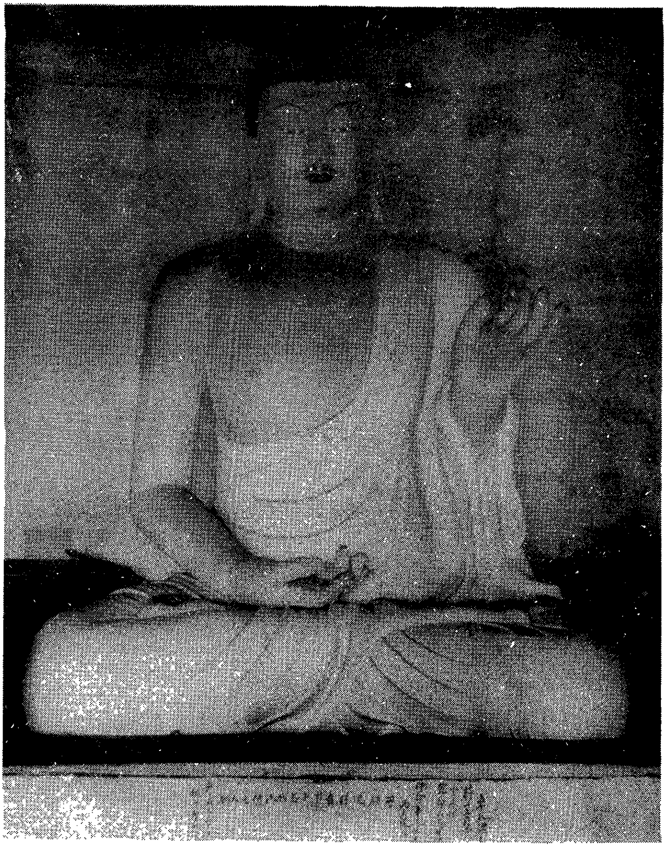
吾人前記二銅佛を見るに全く唐の樣式を傳へし者にして手法の美技工の巧頗る稱贊に

値すへき者あり而るに其本國たる支那にありては歴朝の爭亂により此種の銅佛は梵鐘の厲と共に漸く湮滅に歸し余の兩回の內地旅行中終に伽藍の內部に於て一の唐代の銅佛をも發見すること能はさりき然るに慶州に於て唐式を踏襲せる羅時の大なる銅佛兩三を數ふるを得たるは頗る珍とするに足る況んや其製作の優秀なるに於てをや。

(三) 掘佛寺石佛 (第四十三圖) 掘佛寺は金剛山の麓栢栗寺の下にありしも今廢滅して僅に石佛一區を存せるのみ三國遺事に曰く、

景德王遊幸栢栗寺、至山下、聞地中有唱佛聲、令掘之、得大石、四面刻四方佛、因創寺、以掘佛爲號、今訛云掘石、

と即此四方佛石に相當せる者なり余の往きし時は土中に埋沒して僅に前面三尊佛を陽刻せし者のみ見はれ居たりしか其後今西文學士の實査によれは其周圍を發掘せしに他の三面にも亦各佛體を彫刻しありしと云ふ余の見し時は前面の三尊佛も半は土中に埋沒し一は頭部一は額以上落ちて傍にあり甲は藥師如來の如く天然石より作り出し衣の褶襞を陰刻せり其線條遒勁にして人をして我東大寺大佛蓮座の陰刻佛像を想起せしむ乙は脇侍菩薩にして額上に小佛を刻み胸飾を着け胸衣を纒へり全體の樣式殆我寧樂時代の者に近く面相稍温和の風を帶へり三國遺事の記事掘佛の事を信とすれは或は神文王の頃栢栗寺創立の時製作せられし者一たひ土中に埋沒せしを景德王の時發掘せし者と解すへきか。



佛國寺盧舍那佛銅像

第四十二圖

掘佛寺石刻佛像

第四十三圖

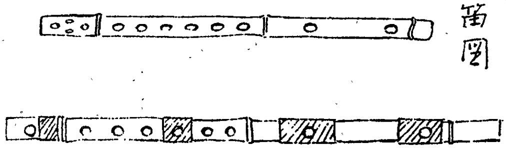
蓋支那にては南北朝より隋唐を通して盛に石窟を作り石佛を彫刻したり我國に於ては石刻の事終に盛ならさりしも韓國にありては彼に倣ひ往々石佛を作りたり是れ其一例に過きす。

（二）　玉笛（第四十四圖）

玉笛は今慶州府暎花樓中に藏せり嶠省勝覽に曰く

長尺九寸、其聲清亮、俗云東海龍王所獻、歷代寶傳、麗祖欲玩之、使人取去、行過鳥嶺、吹之無聲、麗祖知其神物、而還之、至今藏在府庫、

と即是れなり二管あり雌雄に象る甲は長尺五寸六分徑本九分五厘末九分三厘黃質にして處々に小黑點あり乙は長尺八寸一分徑兩端共に一寸黃質にして斑竹の如き黑斑點あり銀板を以て折斷せし所を補綴せる者四處是れ故大院君か攝政の時此兩笛を京城に運はせしに其一を誤て地に墜し破損せしを補修せし者なりと云ふ兩笛共に竹狀に象り尤も巧に節を摸せり中を貫通して一は十二孔一は九孔を穿てり其製作甚精美なり以て當時工藝の進步をトすへきなり。



第四十四圖　玉笛圖

七　結論

吾人慶州附近の遺蹟に就きては調査の時日極めて短かゝりし爲め其總てを觀ること能はさりしも幸に多少重要なる者を研究し新羅時代技術の一斑を知ることを得たり其第一期第二期の遺物に就きては陵墓の外他を發見すること能はさりしも猶我國と支那との關係を究むれは當時文化の性質の如何を髣髴することを得へし。

新羅第一期の遺蹟に就きては吾人唯陵墓を見しのみ而も此陵墓の制度幷ひに副葬品は大に我邦古代の者に親密の關係を有し支那とは反て疎遠なり而も歷史上當時の文化か常に支那の影響を受けしことは明かなる事實にして我國にて古墳より發掘せる銅鏡は漢末より六朝の初めに於て支那に行はれし者と全然一致せる者多し是れ蓋韓人の手によりて我國に傳へられし者なるへく間接に漢韓兩國の關係を實證する者と曰ふへし而も吾人は其他に於て當時技術の一端を推測するに足るへき充分の資料を有せさるを以て是等の研究は更に他日を待たんと欲するなり。

新羅第二期の文化は我飛鳥時代の者と極めて密接の關係を有せり蓋我飛鳥時代の藝術は佛敎と共に當時三國より傳來せし者にして其樣式は新羅第二期の者と同一なるへきことは多言を要せすして明かなり故に第二期の遺物は彼地に於て殆消滅せりと雖も我にあ

りては建築には法隆寺の金堂五重塔中門步廊あり法起法輪兩寺の三重塔あり彫刻には法隆寺法輪寺中宮寺廣隆寺觀心寺等に多くの金銅及木彫乾漆の佛像あり工藝品には法隆寺の玉蟲厨子中宮寺の天壽國曼荼羅等あり以て當時の技術の樣式の如何なる者なりしやを知ることを得へし。

此樣式は當時支那南北朝より傳來せる佛教に伴ひし者なれは亦彼の技術と親密なる關係を有せさるへからす當時新羅は或は直接に或は高勾麗百濟を介して北朝に通し又海路南朝と往來し佛教の興隆と共に彼の文化を輸入したりしなり余は淸國洛陽の龍門鞏縣の石窟寺に於て多數の北朝に屬する佛像を見たり其面相衣文姿勢より之に附屬せる背光天蓋等の裝飾に至るまて大に我飛鳥時代の者に一致する所ありたり即ち知る我飛鳥時代の師たりし新羅第二期の技術は明かに彼と同一流派に屬したりしことを換言すれは新羅に於ては南北朝の感化によりて第二期の藝術を作り更に高勾麗百濟と共に之を我に傳へて飛鳥時代の藝術を成さしめたるなり。

新羅第三期の文化は當時非常の發展を遂けたる唐の影響を受けし者にして國運の隆興に伴ひ著大なる進步をなせり當時の遺物は既に說きしか如く慶州地方に多少存在せり此等を見るに建築彫刻其他の工藝に於ける手法の精美技工の圓熟頗驚嘆すへき者あり其樣式を見るに支那洛陽の龍門西安府靑州府濟南府附近に存在せる唐の遺蹟に於ける者と全

然符節を合するか如く明かに唐式の餘流たることを示せり而も銅佛の如き梵鐘の如き石燈石橋の如き今日既に支那に於て消滅せし所の者を保有し啻に羅朝第三期の技術の如何を知るへきのみならす唐代藝術史上の缺陷を補ふに足れり當期の文化は直接に我邦と關係する所深からさりしも其作り出せる技術の樣式手法か互に符合し互に一致する所あるは彼此共に唐の影響を受けたるか爲めに外ならさるなり。

之を要するに慶州附近に於ける新羅時代の遺蹟は殆と悉く第三期に屬し其量に於て多からされとも猶充分に當時藝術の進步文化の性質を說明し併せて當時我國と支那との文化の關係を知るに足るへき貴重の資料なり而るに今や此等の遺物は漸く壞頽し且保存の方宜しきを得す日に月に消滅せんとしつゝあり惜みても惜むへきことにあらすや。